

42592

教科書文庫

4
810
51-1926
20003 02259

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

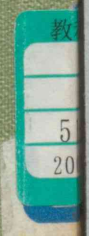
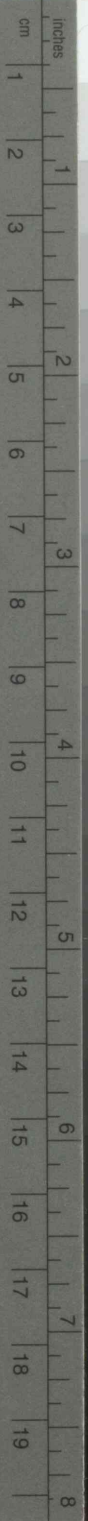


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



編平彌田吉
文國範師
 用部一第
 九卷



資

教科書文庫
4
810
51-1926
2000302259

375.9
Y019

文部省檢定
大正十五年三月十七日
師範學校國語教科用

吉田彌平編

師範國文
第一冊用

卷九

東京
光風館藏版

広島大学図書

2000302259



文部省檢定
大正十五年三月十七日
師範學校國語教科用

吉田彌平編

師範國文
第一冊用

卷九

東京
光風館藏版



師範國文第一部用卷九

目次

一	人生と表現	八波則吉	一
二	かぐや姫	(竹取物語)	四
三	草枕	夏目漱石	五
四	天才と凡人	阿部次郎	六
五	宇多の松原	紀貫之	七
六	うたひもの		七
	神樂		七
	催馬樂		七

目次

一

今様	八
朗詠	八
七 陳蔡の野	八
八 枕草子抄	一〇
春は曙	一〇
この君	一〇
にくきもの	一〇
九 比良の山風	一〇
〔新古今和歌集〕	一〇
一〇 大丈夫の覺悟	一三
幸田露伴	一三
一一 幻住庵の記	一八
松尾芭蕉	一八
一二 長生新浦島	二三
坪内逍遙	二三
一三 現代文學の傳統	三〇
高須芳次郎	三〇

一四 劍難	三九
中村吉藏	三九
一五 文藝と人生	四五
菊池寛	四五



八波則吉
國文學者
第五高等學校教
授
前文部省圖書官

クローチエ
イタリーの
現代の哲學
者
Benedetto Croce
(1866)

師範國文 第一部用卷九

一 人生と表現

八波則吉

一 藝術は表現である

「藝術は表現である」といはれてゐます。これはイタリーの哲學者ベネデット・クローチエの名高い言葉ですが、いふころは所謂文は人なりで、歌でも詩でも小説でも乃至は繪畫でも音樂でも彫刻でも、苟も藝術品と呼ばれる程のものは皆作者の個性のあらはれてあるといふのです。蓋しこれに相違はありますまい。併し「表現を」個性のあらはれといふ意に解しますれば、獨

り藝術のみならず、科學も表現であり、道德も亦表現であります。異なる所は、藝術上の作品が主に感情の表現であるに對して、科學上の發明・發見は知識の表現であり、道德上の嘉言善行は意志の表現であるといふに過ぎません。畢竟するに人間の行動云爲は悉く個性のあらはれてあり、人格の表現であります。

抑、人は何が爲に読み、何が爲に聴き、又何が爲に冥想するかといふに、靈の榮養を攝取せんが爲です。然らば靈の榮養を攝取して何の用をなすかといへば、個性を擴充して之を表現せんが爲です。即ちより多く知り、より深く感じ、又はより強く意欲するのも、結局よりよく言語・動作に表現して、以て自ら満足し、延いて他を導き、世を救はんが爲であります。

以上を總提として、國語教育に關する卑見を開陳しようと思ひ

ます。

二 讀書の鍵

國語教育の目的は、其の形式的方面に於ては、國語に依つて國民相互間に思想の交換を完全に行はせることであり、其の内容的方面に於ては、常識を養ひ、趣味を高尙にし、國民性の涵養に努めることであります。然るに、人に依り時代に從つて、或は形式的方面に全力を注ぎ、又は反對に、内容的方面に重きを置くの差異があります。是は鳥の雙翼・車の兩輪の如く、どちらも等しく大切なもので、其の一を重んじて他を輕んずべきものではありません。

處が、どちらかといへば、現今我が國の初等教育に於ては、概して其の内容的方面に重きを置き過ぎて、形式的方面をいくらか疎

かにしてゐる傾向があります。例へば方言訛語の矯正、或は文字の字畫、又は假名遣等、所謂文字教育を疎かにして、作の鑑賞批評、創作等に専ら時間と精力とを費してゐるやうに見受けられます。で、一言申して置きますが、私の所謂内容的方面、即ち常識を養ひ、趣味を高尙にし、又は國民性を涵養するといふ事は、獨り國語教育のみの掌る所ではなくて、修身、歴史、地理、理科、其の他圖畫、唱歌等、他の教科も等しく關與する所であります。が、之に反して、思想の交換を完全に行はせることを指導するのは國語科獨得の作業であります。即ち、言語及び文字に依つて國民相互間に誤解なく正しく力強く思想を發表する方法を教へる學科は、國語科を措いては他に無いのであります。故に完全に思想の交換が出来るやうに、發音の矯正、方言訛語の除去、假名遣送假

名の訂正等、一般に國語教育の末梢と稱せられてゐる言語教育及び文字教育に今少し力を用ひられるやうに希望します。讀むとは何か。この解釋はいろいろありませうが、要するに「文字を辿つて他人の思想を察知了解すること」であります。即ち「文字を辿つて」文の内容を知る事でありますから、文字は讀書の鍵であります。此の鍵を與へないで文の内容といふ寶庫を探させようとするのは、それは無理です。だから、素讀、解釋を旨とする語句本位の教授法が如何に原始的の教授法であるにもせよ、其の語句を大切に取扱ふ精神だけは何處までも尊重しなければなりません。

近頃自由教育や藝術教育などが盛に唱道されてをり、また一方に漢字節減問題や假名遣改正問題などが討議されてをります

ので、自然文字教育が輕視されるやうになつたのだらうと推量
します。しかし、文字は讀書の鍵であり、文字教育は國語教育の
基礎でありますから、如何なる時代に於ても言語の整理・統一、又
は用語の精確、文法の純正などは決して忽せにすべきものでは
ありません。大意の把住、作者の想定、文の鑑賞・批評・創作等、所謂
文章本位の國語教授法は、何處までも語句本位の教授法の堅牢
なる基礎工事の上に建てられた建築物でなければなりません。

三 讀むとは何か

さて、再び「讀むとは何か」といふことを考へて見ますに、是は頗る
興味の多い問題です。或人は「讀むとは他人の中に自己を見出
すことだ」と申しましたが、至極面白い解釋です。尤も他人の中
に自己を見出すことは必ずしも讀方ばかりではなく、聽方即ち

中宮
藤原彩子
父は關白藤原道長
上東門院
承保元年（七五）
崩年八十七
宣耀殿の女御
藤原芳子
父は左大臣藤原師尹
絶世の佳人
康保四年（六七）
卒

他人の談話なり演説なり講演などを聽くことも亦他人の中に
自己を見出すことでありますが、とにかく讀方といひ、聽方とい
ひ、國語教授の主なる仕事は、言語又は文字を通して他人の中に
自己を見出させる事であります。枕草子にこんな話がありま
す。

一條天皇の中宮が或日官女達に古今集の諳誦を試験されまし
たところが、十首ばかり覚えてゐたのが上の部で、大抵の女房共
は五六首位しか諳記してゐませんでした。其の時中宮が仰せ
られますには、昔村上天皇の御時、宣耀殿の女御が古今集を諳じ
て居られる由を聞召されて、天皇が一日試験されたことがある。
即ち女房に碁石の數取を命ぜられて、さて卷一から順々に問は
せられたところが、二十卷、千百十一首、一首も間違へられること

がなかつた。偉い御方だ」と中宮がしきりに宣耀殿の女御を御褒め遊ばしますと、此のお話をお聴き遊ばしていらせられた一條天皇は、女御も偉いが、村上天皇の御根氣の強いのに感心した。よくも二十卷問はせられたものだ。自分なら三卷か四卷で中止したらうに、と仰せられます。するとお側の女房達は、昔はえせ者もすきをかしろこそありけれ、と言つて、碁石で數取を命ぜられた女房達も偉かつたに違ひないと褒めます。天皇は天皇を、中宮は中宮を、女房達は女房達を、それ／＼他人の中に自己を見出してゐられるのです。私は此の記事を読んで宣耀殿の女御のお父さん——小一條左大臣師ヲ公が、お姫様が只今試験を受けていらつしやる、と聞いて、衣冠束帯をなされて、神佛に御祈願あそばす個處に深い感激を催しました。思へば私は私で他

師尹
藤原忠平の子
基經の孫
安和二年(二六元)

人の中に自己を見出して居るのであります。すなはち自己の經驗を以て他人の經驗に當てはめてゐるやうなものであります。

で、讀方教授に於て、同一教材を兒童に與へても、兒童はそれ／＼個性に應じて、所謂十人十色に了解してゐるものと思はなければなりません。朝鮮の新讀本に、

カンカンカン、

カネガナル。

ケイコノカネカ、

ヤスミノカネカ。

といふ童謡が出てゐますが、之を讀んで、甲の兒は學校内での所感だといひ、乙の兒は門外での所感だと主張し、丙の兒は學校附

近の自宅での所感だと發表しませうとも、何れも自分々の經驗を語るもので、それが間違つてゐるとも申されません。童謡・俳句・短歌・長詩など趣味本位のものには往々此の様に諸説があるものですが、詰り各自が自己を他人の中に見出してゐる結果、當然かうなる筈のものです。

申す迄もなく、教師は教師で、教壇に立つまでには一個の定案を持して、兒童の意見を聞いた後で、私は斯う思ふ」と最後の斷案を下すべきです。文の趣味に關してもなほ、私は此處も好いと思ふ」といふ風に、教師自身の嗜好をも語るべきです。指導と暗示は如何なる自由教育にも藝術教育にも、教育上關くべからざることでありませぬ。何となれば兒童の個性は、教師の指導又は暗示に依つて價值づけられるものでありますから。

然るに世には「個性尊重」といふ美名の下に、兒童の生れながらの個性――寧ろ自然性とも稱すべきものをも尊重し奉つて、兒童の言説若しくは成績品に大人が干渉するのは、大人の冒瀆だなどと云つて罪惡視する教育者がありますが、是は飛んだ間違であります。個性は勿論尊重しなければなりません、個性の擴充を忘れては教育の意義は全くゼロです。

四 個性の擴充

個性の基調をなすものは遺傳性です、持つて生れた根性です。諺に「三つ子の根性百まで」と申す如く、持つて生れた根性はなかなか改らないものです。併し是に多少の變化を與へ得るものは即ち教育です、躰です、習慣です。習慣が第二の天性となつて、

ベルグソン
Henry Bergson
(1859-) フランスの
現代の哲學者

持つて生れた根性に變化を與へ、改善を加へ、擴充を遂げるのであります。ベルグソンが「生命は流動である」といつた如く、吾々の個性は一瞬毎に擴充さるべき性質のものです。それを何ぞ一定不變のもので、もあるごとく思惟して、成るべく兒童の個性に手を觸れまいとするのは教育の怠慢と申さなければなりません。自由教育の思潮が盛になり、自學自習を獎勵するのは結構であるが、動もすれば教師の指導又は暗示を怠る傾向があるのは甚だ謂れないことであります。

私どもが尋常小學國語讀本を編纂してゐた際「兒童本位」を標榜しながら、一方に於ては兒童の獨力では到底素讀又は解釋の出來ない文字や文章を書いてゐました。或人は之を編者の矛盾だといつて非難しましたが、私どもは其の非難を甘受しつゝ、教師の

指導又は暗示を要する教材を挿入しました。例へば卷六「磁石」の中の「果シテ」といふ語又は同卷「記念の木」の中の

はじめて聞いた記念の木、大事にするとおつしやつた。

を地の文にしてゐる理由等、これは是非教師の指導を要する個處です。斯ういふ個處があつて、兒童は知識を増し、新しい經驗を得る譯です。若し兒童の力で讀本の隅から隅まで分つてしまつたら、それは讀本ではなくて、自習書か又は課外の讀物です。趣味に就いても同様です。間、鑑賞材料を挿入して教師の指導又は暗示に依つて兒童の趣味を向上させようと企て、ありません。

綴方教授に於ても、もう少し教師の指導、添削が必要と思はれます。又自由選題の外、時に課題或は補題を與へて、一齊指導を試

西條八十

詩人
明治二十五年東
京生

みるの要があります。又綴方の時間に同じ題目に就き、教師も自分の體驗を書いて兒童に讀んで聞かせる事が、間接に兒童の綴方の能率を増進させる事に役立ちます。大人が兒童になつて書く事も結構ですが、時には大人は大人で精一杯のものを書いて兒童に示すことも亦大切な仕事であります。西條八十氏が童謡創作の態度には幾分か此の指導又は暗示の意味がある様です。氏が「鸚鵡」と時計の序文の中に、

童謡詩人として私の使命は、靜かな情緒の謠によつて、高貴なる幻想即ち叡智想像を世の兒童たちに植ゑつけることである。

と言ひ、或は

私がかかり難解の詞句と思はれるものをも顧みずに用ひた

のは其の爲である。かうした範疇の作は、一面兒童には解せられずとも、ただその響だけ彼等に傳はれば十分であると私は考へる。

と言はれてゐるのは、指導又は暗示に依つて彼等の詩趣を示唆しようとして企てた證據であります。固よりこんな態度で書いたものばかりでは、讀本の程度が高過ぎますが、純然たる兒童本位の文章の外、折々此の種の教材を採擇する事は、蓋し讀本の使命を果す上に當然の義務ではありますまいか。現行の國語讀本の中には兒童本位を高調しながら、一方には教師の手腕を信賴して其の指導啓發を豫期した教材が多く挿入してあります。

序に童謡ではありませんが、西條氏の近作に「銀座哀唱」と題する

新詩があります。読んでみませう。――

橋も並木も焼け失せて、

夢の銀座となりけり。

そゞろ淋しくさまよへば、

潰えし藁に秋日照る。

吾が兒のために紅き靴、

購ひたる店は何處ならん。

燈火明きカツフェーに、

集ひし人のかげも無く。

夕となりて糠雨の

焦げし歩道をぬらすとき、
我はあはれに偲ぶかな、
雪ふるころのこの街を。

去年の楽しきクリスマス、
その夜のごとく鐘は鳴り、
その夜のごとく樅の木に
金銀星は懸るとも。

はた明治屋の店さきに
春待つ子等にうち交り、
赤き帽しておどけつゝ

明治屋
銀座二丁目にあ
る西洋食料品な
どの店

サンタクロス
クリスマス
の前夜に窓
から這入つ
て来て子供
の靴下の中
に種々の贈
物を入れて
いくといふ
不思議な老
人

Barrack
バラック

サンタ・クロスの踊るとも。

褥はうすきバラックに

夜半の粉雪のかゝりなば、

疲れてねむる町びとの

夢路やいかに寒からん。

荒れし都を痛みつゝ

夕を歩む傘のそと、

汝も淋しき一人かな、

時焼かれし燕。

これは程度からいへば高等女学校の讀本にでも入れるべき性

Matthew Henry Barker
1790—1846)

バーカー
イギリスの
文學者

質のものですが、これを讀んで尋常五六年の女兒は相當に哀情を催しました。誰かゞ趣味の文は兒童に「面白いか」と聞くべきである。決して「分るか」と聞くべきでないと申したが、それはさうかも知れません。面白くさへあれば、分るやうには教師がして下さるものと思つて讀本の文學的教材を選びました。バーカーでしたか、讀者は文學が彼れの生活を反映してゐるからといふ理由ばかりで價値を認めるのではない。寧ろ文學が彼れの生活を伸展し、又擴大してくれるといふ理由から貴い價値を認めるのである。といふ意味の事を言つてゐますが、至言です。我は現實に於ては決して他人の生活を生活する事は出来ません。然るに我々は文學に於ては自由に他人の生活を生活することが出来ます。かくして我々は日々の體驗から得る經驗の

外に想像的經驗を重ねて茲に個性の擴充を圖るのであります。例を擧げて説明します。

五 童謠と感情移入

童謠の教育的價値は主に感情移入の點に在ります。物象の中に自我を没入して、全く自他の區別を失ひ、渾然として一如となるところに在ります。

笛、なんて穴あいてんね、

そつから風入つて寒いやろ。

そいで寒い言うて

泣いてんねやろ。

と言つて笛に話しかける作家小林章子さんの態度は純然たる物我一如で、笛即ち作家、作家即ち笛であります。で、此の時作家

は童謠を作つてゐるのではなくて、實は童謠が生れてゐるのであります。恰も泉から水が涌き出るやうに、童謠が作家の口を衝いて、我知らず溢れ出てゐるのであります。物と我と一つになる——あゝ、これほど深い同情がありますか。幼兒の嬉戲する様を見れば全くの自我没入であります、美の極みであります。我々大人が童謠を作る時にも、出来るだけ此の境界に近づきたいものです。少なくとも兒童に童謠を作らせる時には是非此の態度に到着させたいものです。かくてこそ一方には童謠の傑作が出来、他方には物に生命を見出し愛を感じ、同情の美德を養ひ得るものと思はれます。

夕やけ、

こやけ、

のんのさんが、
やけどする。

と、斯う唄ふ當年四歳の平井允子さんや、

手紙を出した、

お月様に出した。

さぶいでしよ、

お月様。

と斯う唄ふ幼稚園通ひの章子さんの心、純真無垢な心を思つて、
私は涙ぐましい氣になります。

尋常二年の田中ミッコさんが、

ばら

さいたく

ばらの花

一枝とりたい

ばらの花。

一枝とつたら

いたからう。

花をとつたら

さびしかろ。

と歌つてゐます。「一枝とつたらいたからう。まではミッコさん
自身の事です。しかし最後の「花をとつたらさびしかろ。は、はやミ
ッコさんの自我を花に移して花の氣持と一致してゐるのであ
ります。又、尋四、鈴木正一君が、星を見て、
お星さん二つ、

見てゐたよ。

死んだ妹の

おめんめが。

空から僕を

見てゐたよ。

涙で

おめんめ

光つてた。

と歌つてゐますが、涙で光つてゐたのは果してどちらの「おめん

め」でしたらう。

是等の童謡を鑑賞する時、児童の手も自らミッコさんと共に痛さを感じ、児童の目も我知らず正一君の目と同様涙で光つてゐるでせう。

物象に對する作者の態度、作物に對する讀者の態度、前者は即ち創作的態度で、後者は即ち鑑賞的態度ですが、童謡に於ては殆ど一分の隙間もありません。學者に依つては前者を感情表出といひ、後者を感情移入と稱してゐますが、私はいづれも純然たる感情移入と認めて美の原則と見做すものであります。

自他の區別を撤して物我一如となり得る境界——換言すれば、すつかり物に成り切る境界——これを私は感情移入と稱して、童謡教育の主なる價值と主張するものであります。で、たとひ

兒童が童謠を作らなくとも、之を鑑賞する場合は作家同様、感情移入の域に達せしめられん事を希望します。今一つ例を挙げれば、

えんとつから
煙がぶく／＼、
のんのさんが
よごれてしまふよ。

といふ童謠に對しては「煙突の煙よ、もう大抵にしてよしておくれ、お月様が汚れて了ふよ。あれ、また出る。じれつたい。いやな煙だこと」と地團太踏んでお月様を愛護する作者允子さんの氣持を味はせて、宇宙に潛む生命の流れ、愛のさゝやきに耳傾けさせてほしいものです。これがやがて人の心を淨化し、美化し、

神格化させる童謠の眞價であります。

前にも申した如く、我々は現實の上では他人の生活を生活する事は出来ませんが、藝術の上に於て、即ち鑑賞する事に於て、自由に、心の中で他人の生活を生活して自己を擴充する事が出来るのであります。藝術教育の必要なる所以です。

以上は主に讀方と聽方の方面に就いてありますが、以下暫く綴方と話方の方面に關して申します。

六 表現の本能

人には表現の本能といふものがあつて、讀んだもの、聽いたもの、知つたもの、感じたもの——苟くも心の中を一度通つたものは、何かの機會に之を表現しなければ已まないものです。徒然草に「おぼしき事はぬは腹ふくるゝわざなれば筆にまかせつゝ」

云々と書いてありますが、此の「思ふこといはねば腹ふくる」といふ事は、平安朝の末期に出た大鏡にも出てゐて、而も大鏡のは、おぼしきこといはぬはげにぞ腹ふくる、心ちしける。かゝればこそ昔の人は物いはまほしくもなれば穴を掘りては言ひ入れけめとおぼえ侍る。

とあつて、「げにぞ」と書いてあります。「げに」とは「成る程」といふ意で、誰かと言つたやうにとか、何かに書いてある通りにとか、必ずそれより前のものを思ひ起して首肯する時に用ひる副詞です。から「思ふ事いはねば腹ふくる」と云ふ事は、平安朝時代には既に人口に膾炙してゐた諺かも知れません。とにかく人には表現の本能があつて、知つたまま、感じたままには、じつとして居られないものですが、是が誠に貴い事です。若し、知つたまま、感じた

三國遺事
三冊
高麗の僧一然者

まゝに、じつと自分一人の腹にしまつて置けるものだつたら、世は決して今日ほど進歩しては居ない筈です。然るに幸ひな事には、思しき事いはねば腹がふくれてかなひませんから、人に話します、物に書きつけます。話す相手が無いか、書きつける能力が無い時には、穴を掘りては言ひ入れ侍ります。これで思ひついたのは三國遺事に出てゐる朝鮮の傳説です。新羅王の耳を見た頭巾屋が「王様の耳は驢馬の耳」と竹藪の中で發表したら、之を聞いた竹も聞いた儘でじつとして居られず、風が吹く度毎に「王様の耳は驢馬の耳」とさゝやいたといふ事です。似寄つた話が英國にもあつて、理髪師が道端の木に話せば、道端の木で作つた豎琴がまた歌ふといふ風になつてゐますが、何れにしても表現の本能が、如何に、抑へても抑へ切れない強烈な衝動であるか

を物語つて居ります。言論の自由が絶えず絶叫される所以です。

話方及び綴方は實に此の「表現の本能」に其の根柢を有してゐる國語の二分科であります。即ち聽方に於て他人のお話を聴き、讀方に於て他人の文章を讀んで「なるほどさうだ」と聞き惚れ見惚れしてゐるうちに、すでに表現の芽生えがあります。或人が「すべての審美的鑑賞は自我の表現である」といつてゐますのは、即ち此の事です。例へば、兒童が面白い童話を聴き、または讀み、あるひは面白い學校劇を見てゐる際、恍惚として所謂忘我遊神の境に居ますが、能く考へて見ますれば、彼等は知らず識らず作中の人物と共に彼等の自我を表現してゐるのであります。必ずしも彼等が手眞似、足眞似をしてゐるといふのではありませ

Film
フィルム

ん。が、彼等は童話又は學校劇の中で彼等の自我の「想像的實現」を爲してゐるのであります。それ故にこそ作中の人物が苦しめば苦しみ、樂しめば樂しみ、成功すれば恰も我が事の如く拍手喝采して満足するのであります。

さて聴き終へ、又は讀み終へ、或は見終へた兒童は之を他に語り、或は人に示さずには到底我慢し切れるものではありません。夕飯後の家庭が賑やかなわけです。活動から歸つた兒童は、どんなに叱られても、又どんなに夜が更けてゐても、一通りフィルムの大要を語るものです。語らせなければ寐言に言ひます。これが誠に貴い所です。此の本能があればこそ、話方が上手になり、綴方が巧くなり、藝術が出來、文化が進展するのであります。世には兒童の話方、綴方、又は童話學校劇等の中、創作味の尠いも

のを一概に模倣だと言つて排斥する論者がありますが、模倣から創作へ」といふ事を綴方のみならず、一般の教育の標語と考へてゐる私は、決して模倣を左様に賤しむべきものと思ひません。否、模倣を教育の基礎とさへ考へてゐるのです。「先生の眞似をしなさい。」これが抑、教育の眞諦であると考へてゐます。眞似られて恥かしい人なら教育者たるの資格が無いとさへ考へてゐます。

話が少し横道へ反れはじめましたが、とにかく讀本の中の教材は、或は綴方の模範文に、或は話方の手本に、或は學校劇の粉本に使用して戴いて聊かも氣恥かしく考へてゐません。兒童が之を模倣する時は、はじめのうちこそ手本に囚はれますが、間もなく兒童の個性が現れはじめて、決して模倣で満足しないものです。

有島生馬
本名は壬生馬
洋畫家
文學者
明治十五年横濱
生

模倣の個性化——これが即ち創作への階梯であります。有島生馬氏が「自由畫を難んず」の中に面白い事を言つてゐますから、其の一節を讀んで見ます。

若し異常な天才を恵まれてゐなければ、何等かの方法で習ひ、學ぶより仕方がない。……たとひ天才を以て許さるべき人の生涯に徴するも、初期の作品が常に先人と時代とを模倣する域を脱し得ないのを見ても分る。まして一畫生、一學童に「自然を見よ」と教へるのは、いゝとして、實行させようとは迂遠である。言葉の美しさに惑はされて、實は混亂した内容を擱んでゐるのである。

他山の石として、綴方教授の上にも参考とすべきであります。

七 人生の目的

アルハ
Alpha 希臘字母の
第一字
こゝは或者
の意

人生の目的は「+A」であるといふのが私の持論であります。一言にして申せば、既存の文化に何程かの寄與・貢獻を爲すことが人生の目的であるといふのです。即ち文化の追加であります。今日まで幾億萬の人類が築き上げた文化の上に更に何程かの追加をなす事が人生の目的であります。此の目的を遂行する爲、我々は或は聴き或は読み、絶えず個性を擴充して、昨日よりは今日、今日よりは明日、よりよい表現を爲し得る資格を作らなければなりません。其の基礎工事を爲すものが即ち國語教育であります。て冒頭に於て、私は國語教育の目的は、其の形式的方面に於ては、國語に依つて國民相互間に思想の交換を完全に行はせる事であるとし、其の内容的方面に於ては、常識を養ひ、趣味を高尙に

し、國民性の涵養に努める事であると申しました。即ち國語教育は、内容的方面に於て、讀方及び聽方に依つて知情意を圓滿に發達させ、形式的方面に於て、話方及び綴方に依つて正しく力強く表現して、現在及び將來永く他人に生きる能力を得させようとするのであります。表現は他人に生きる事です。讀むとは何かといふ項で、讀方又は聽方は他人の中に自己を見出すこと、換言すれば他人の生活を生活する事だと申しましたが、これを逆に、表現即ち綴方又は話方は、自己を他人の中に植ゑつけること、換言すれば他人に生きる事であります。表現に感傳性と永續性があります。これあるが爲に人は他人に生きる事が出来るのであります。我々は出来るだけ其の感

傳性を廣く、永續性を久しく保つ事の出来るやうな表現をしなければなりません。之をするには、擴充したる個性を全我的に投出しなければなりません。一心不亂、物に成りきる態度に出なければなりません。物我一如、恰も幼兒が童謠を作り、若しくは兒童が童謠を鑑賞する時の如き態度に出なければなりません。芭蕉翁が、

きのふの發句はけふの辭世、今日の發句は明日の辭世、我が生涯いひ捨てし句々、一句として辭世ならざるはなし。

と言つた如く、常に臨終の覺悟を以て事に當らなければなりません。臨終の覺悟と云へば、先年廣島縣新港沖で沈没した潜水艦の艦長佐久間大尉の公遺言を始め、尼港事件の折獄屋の壁に書残してあつた同胞の文字や、つい先日引揚げられた第七十號

佐久間大尉

名は勉

明治十二年若狭

小濱生

明治四十三年十

一月十五日潜水

艦沈没と共に殉

死

年三十二

松波

名は仁一郎

海上法の専門家

東京帝國大學教

授

慶應二年(二三六)

大阪府生

潜水艦乗組員の遺書など、皆惻々人を動かし、永く人の胸に生きる表現であります。中でも佐久間大尉の遺言に至つては、とても人間業とは思はれない程見事な表現です。

當時此の事が我が國上下を通じての大評判となつておりました。際、松波法學博士が東郷元帥に出會つて、「偉い男が生まれましたね」と賞讃されましたら、東郷元帥は只一言、「當り前の事さ」と仰せられたさうです。松波博士は、「若しこれが東郷元帥でなかつたら、負惜みを言ふな」といつて撲つてやりたかつたが、平素畏敬してゐた大將だから黙つて聽いてゐた。と或公開の席上で語られました。ところが諸君、過般の大震災の刹那、我が東郷元帥は如何なる振舞をなさいました。或日の東京朝日は次のやうに報道してゐます。

一日
大正十二年九月
一日

話はすこし古いが、一日のがらくの刹那、麴町の東郷邸では女中を始めみんなが先を争つて戸外へ飛出すさわぎの中でひとり元帥の姿だけが戸外に見えない。家人が心配して、びくびくもので元帥の居間に入つて見ると、顔色一つ變へない元帥は落ちついて、大搖れの中で足拍子を取りながら、軍服を着替へて居られる。家人が喫驚して、今頃軍服を着てどうなさいますと尋ねると、元帥は靜かに、攝政宮の御安否が氣遣はれる。早速伺候しなくてはならぬと云はれたさうだ。

私は此の記事を読んで、思はず險が熱くなりました。あゝ大將。流石は東郷元帥である。殉難艦長佐久間大尉の偉業を、當り前の事さと言はれた方ほどある。國語讀本の卷八に出てゐる加藤清正——伏見城に眞先かけて伺候した名高い地震加藤にも

日に新に
殷の湯王が面を
洗ふ盤即ちかな
だらひの銘に荷
日新日日新又日
新

劣らぬ精忠至誠のお方である。かゝる際に人間の偽り飾らぬ眞價が現れるものです。松波博士も此の記事を見てどんなに満足された事だらうと想像します。人は平素の心がけが大切なもので、不用意の中の一言一句にも其の人の人格があらはれるものであります。しかも其の人格は日に新に、日々に新に、又日に新に、修養を重ねて磨き上げられるものであります。

佐久間大尉が、まだ士官候補生であつた時のことでしたが、舊師成田鋼太郎先生の宅で、先生のお子さんが縁側から落ちられようとした時、思はず「あつ」と奇聲を發して、男子がさうあわてるものではないと先生に叱られました。大尉は大いに慚ぢて、それから鎌倉で參禪されたと云ふ事です。一朝大尉の死が傳はる

や、成田先生は大尉はむざくと死ぬ人ではない、何か沈勇を示すものがあるべきだといふ豫感があつたが、はたして彼の遺言があつたと、先生の著述に書いてあります。是に由つて觀ても、教育が如何に個性の擴充に役立つか、説明されます。遺傳十教育、是が即ち人格であります。我々教育者はかくして被教育者の遺傳性に絶えざる變化改善を加へて彼等の全き人格を作りつゝあるもので、取りも直さず彼等被教育者の人格中に生きつゝあるのであります。願はくは權威ある指導及び暗示によつて兒童に智情意の圓滿なる發達を遂げさせ、以て直接人類の文化に何程かの追加をして人生の目的を完全に成就したいものであります。(第二國語の講習)

竹取の翁

使老

弘仁

竹取の翁が竹の
野山に入りて竹
を取ること業
とした老人

二 かぐや姫

春の初よりかぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の月の顔見るは思むこと、制しけれども、ともすれば人まには、月を見てはいみじく泣き給ふ。ふづきの望の月に出で居て、切に物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、かぐや姫例も月をあはれがり給ひけれども、この比となりては、たゞ事にも侍らざめり。いみじく思し歎く事あるべし。よく見奉らせ給へといふを聞きて、かぐや姫にいふやうな、なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世にといふ。かぐや姫、月を見れば、世間心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。

といふ。かぐや姫のあず所あずかに到りて見れば、なほ物思へるけし
 きなり。これを見て、あが佛何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと
 何事ぞ。といへば、思ふこともなし、物もの心細く覺ゆる。といへば、
 翁、月を見給ひそ。これを見給へば、物思すけしきはあるぞ。とい
 へば、いかでか月を見てはあらむとて、なほ月出づれば、出で居つ
 つ歎なげき思へり。夕ゆふ闇には物思はぬけしきなり。脚あしの程ほどになぬ
 ぬれば、なほ時々は打歎うちなげき泣きなどす。これをこれつかふものども、
 なほ物思すことあるべしとさ、やけど、親を始めて、何事とも知
 らず。

はづき望ばかり、新あたらの月に出で居て、かぐや姫といいたく泣き給
 ふ。人めも今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親ども、
 何事ぞと問ひさわぐ。かぐや姫泣くく、いふ、さきくも申さ

むと思ひしかども、必ず心惑し給はむものぞと思ひて、今まで過
 し侍りつるなり。さのみのみはとて打ちいで侍りぬるぞ。己が
 身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それをそれなむ昔の
 契なりけるによりてなむ、この世界にはまうて來りける。今は
 歸るべきになりければ、この月のもちに、かのもとの國より迎
 に人々まうて來んず。さらさらずまかりぬべければ、思し歎かむが
 悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。といひて、いみじく
 泣くを、翁、こはなでふことを宣ふぞ。竹の中より見つけきこえ
 たりしかど、菜種なづなの大きさはせしを、わが丈立竝ぶまで養ひ奉
 りたるわが子を、何人か迎へ聞えむ。まさまさに許さむや。といひて、
 「われこそ死なめ」とて泣きの、しること、いと堪へ難げなり。か
 ぐや姫のいはく、月の都の人にて父母あり。片時の間とて、かの

國より一すのふを来しこゝろかども、かくこの國には、數多の年を経ぬるに
なむありける。かの國の父母の事もおほえず、こゝにはかく久
しく遊び聞えてならひまつれば、いみじひまじからむ心地もせず、悲し
くのみなむある。されど己が心こゝろならずなむ罷りなむとする。といひ
て、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人ども、年比としごとならひて、立別れ
なむ事を、心ばへなどあてあてやがかに、美しかりつることを見ならひ
て、戀こひしからむこゝろことの堪たへがたく、湯水も飲まれず、同じ心に悲し
がりけり。

この事を帝聞し召して、竹取が家に御使遣はさせ給ふ。御使に
竹取出で會ひて泣くこと限なし。この事を歎くに、髪も白く、腰
も屈り、目も爛れにけり。翁今年は五十許なりけれども、御思に
は片時になむ老になりけると見ゆ。御使仰言とて翁にいは

六
左右の近衛衛門
兵衛尉

姫
竹取の翁の妻

く、いと心苦しく物思ふなるは、實にかと仰せ給ふ。竹取泣く泣
く申す、この望になん、月の都よりかぐや姫の迎にまうて來なる。
たふとく問はせ給ふ。この望には、人々賜はりて月の都の人ま
うて來ば、捕へさせむと申す。御使歸り参りて、翁の有様申して、
奏しつることゝも申すを聞し召して宣ふ。一目見給ひし御心
にだに忘れ給はぬに、且暮見馴れたるかぐや姫を遣りては、いか
が思ふべきとて、かの望の日後所司々に仰せて、勅使には少將高野大
國といふ人を差して、六衛のつかさ合せて、二千人の人を竹取が
家に遣はす。

家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かり
けるに合せて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓矢を
帶して居り。母屋の内には、女どもを番にすゑて守らす。 姫塗

餘籠
土藏造りの藏

籠の内にかぐや姫を抱へて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはく、かばかり守る處に、天の人にも負けむや。といひて、屋の上に居る人々にいはく、つゆも物が空に翔らば、ふと射殺し給へ。守る人々のいはく、かばかりして守る處に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して、外にさらさむと思ひ侍り。といふ。翁これを聞きて、頼しがり居り。

これを聞きて、かぐや姫は、鎖し籠めて守り戦ふべきしたぐみをしたりとも、あの國の人をばえ戦はぬなり、弓矢して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば皆開きなむとす。あひ戦はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。翁のいふやう、御迎に來む人をば、長き爪して、眼をつかみつぶさむ。さが髪を取りてかなぐり落さむ。さが尻を掻きいでて、

推定

こゝらのおほやけ人に見せて、恥見せむ。と腹立ちをり。

かぐや姫は、はく、聲高になのたまひそ。屋の上に居る人どもの聞くにいとまさなし。いますかりつる志どもを思ひも知らて罷りなむずることの口惜しう侍りけり。長き契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと、思ふが悲しく侍るなり。親たちのかへりみをいさかだにつかう奉らで、罷らん道も安くもあるまじきに、月ごろも出で居て、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして去りなむことの、悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人は、いと清らにて、老いもせずなむ、思ふこともなく侍るなり。さるところへまからんずるも、いみじくも侍らず、老い衰へたまへるさまを、見奉らざらむこそ戀しからめ。といひて泣く。翁胸痛

きことなしたまひそ。まひたさるうるはしき姿したる使にも障らじとね
たみ居り。

かゝる程に宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗りて、降り來て、地より五尺許あがりたる程に立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物に魔はるゝやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を取立てむとすれども、手に力もなくなりて、委え屈りたる中に、心さかしきもの、念じて射むとすれども、外さまへ往きければ、何れも戦はで、心地たゞしれにshれてまもりあへり。立てる人どもは、装束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その

中に王とおほしき人、造磨家にまうで來といふに、猛く思ひつる造磨も、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、汝をさなき人、聊かなる功德を、翁つくりけるによりて、汝が助にとて片時のほどとて降しゝを、そこの年比、そこの金賜ひて、身を換へたるが如くなりけり。かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許に、しばしおはしつるなり。罪の限はてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く能はぬことなり。はや返し奉れといふ。翁答へて申す、かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘になりぬ。片時と宣ふに怪しくなり侍りぬ。又他處にかぐや姫と申す人ぞおはしますらむといふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせて、いざかぐや姫、穢き處

に、いかで久しくおはせむといふ。立て籠めたる所の戸、即ちただあきに関きぬ。格子ども、人はなくして開きぬ。姫抱きて居たるかぐや姫外に出でぬ。え留むまじければ、たゞさし仰ぎ



かぐや姫天に昇る

て泣居り。

竹取心惑ひて泣きふせる所に寄りて、かぐや姫いふ、こゝにも心にもあらで、かく罷るに、昇らるをだに見送り給へ」といへども、何しに悲しきに見送り奉らむ。われをいかにせよとて棄て、は昇り給ふぞ。具して率ておはせね」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書き

て罷らむ。戀しからむをりく、取出でて見給へ」とて、打泣きて書くことは、この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまで、侍らで過ぎ別れぬること、かへすく、本意なくこそおほえ侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも墜ちぬべき心地すと書置

く。天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の薬入れり。一人の天人いふ、壺なる御薬奉れ、穢き處のものきこしめしたれば、御心地悪からむものぞ」とて、持てよりたれば、聊か嘗め給ひて少しかたみとて、脱ぎおく衣に包まむとすれば、或天人包ませず、御衣を取出して着せむとす。その時にかぐや姫「しばし待て」といひて、「衣着せつる人は心ことになるなり。」と

いふ。物一言いひ置くべき事ありけり。といひて文書く。天人
遅しと心もとながり給ふ。かぐや姫、物知らぬ事な宣ひそ。とて、
いみじくしづかに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまな
り。「かく數多の人を賜ひて留めさせ給へど、許さぬ迎まうて來
て、取率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと、宮仕つかうまつら
ずなりぬるも、かく煩はしき身にて侍れば、心得ず思し召しつら
めども、心強くうけ給はらずなりにし事なめげなるものに思し
召しとゞめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる。とて、

今はとて天の羽衣着るをりぞ

君をあはれとおもひいでぬる。

とて、壺の藥添へて、頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人取り
て傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣打着せ奉りつれば、翁を

頭中將
藏人頭兼近衛中
將

いとほし悲しと、おぼしつる事も失せぬ。この衣着つる人は、物
思もなくなりにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇り
ぬ。その後翁、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書置き
し文を読み、聞かせけれど、何せむにか命も惜しからむ。誰が
爲にか、何事もやうもなし。とて藥もくはず、やがて起きもあがら
ず病み臥せり。

中將人々を引具してかへり参りて、かぐや姫をえ戦ひ留めずな
りぬることをこまゝと奏す。藥の壺に御文添へてまゐらす。
ひろげて御覽じて、いといたくあはれがらせ給ひて、物もきこし
めさず、御遊などもなかりけり。大臣上達部を召して、いづれの
山か天に近きと問はせたまふに、ある人奏す、駿河國にあるなる
山なむ、この都も近く天も近く侍る。と奏す。これを聞かせ給ひ

上達部
殿上人

て、

あふことも涙にうかぶわが身には、

しなぬくすりも何にかはせむ。

かの奉る不死の薬の壺に、御文具して、御使にたまはす。勅使には月岩笠といふ人を召して駿河國にあなる山の頂にもて行くべきよし仰せ給ふ。峯にてすべきやう教へさせ給ふ。御文不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃すべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、兵士ども數多具して山へ登りけるよりなむ、その山をふしの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へたちのぼるとぞいひ傳へたる。(竹取物語)

夏目漱石

名は金之助
英文學者
小説家
大正五年歿
年五十

三 草 枕

夏 目 漱 石

山路を登りながら考へた。

智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い處へ引越したくなくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出来る。

人の世を作つたものは神でもなければ、鬼でもない。矢張向三軒兩隣に、ちらくする唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて越す國はあるまい。あれば、人てなしの國へ行くばかりだ。人てなしの國は、人の世よりも猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處を、どれほ

隔水東西往、
白雲往也還。
東家松嶺起、
西屋竹簷々、
漱石山人詩畫。



清々松嶺往
白雲往也還
東家松嶺起
西屋竹簷々
漱石山人詩畫

(筆石漱目夏) 家

田
どか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊にするゆゑに尊い。
住みにくき世から、住みにくき煩を引抜いて、有難い世界をまのあたり寫すのが詩である、畫である。或は音楽と

彫刻とである。こまかに言へば、寫さないでもよい、只まのあたり見れば、そこに、詩も生き歌も涌く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。

この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、よく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱する點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得る點に於て、我利我慾の羈絆を掃蕩する點に於て、——千金の子よりも、萬乗の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして、明暗は表裏の如く、日のある所にはきつと影がさすと悟つた。三十の今日は、かう思うて居る。喜の深きとき、憂愈深く、樂みの大きなほど、苦みも大きい。これを切放さうとする、身が持てぬ。片付けようとすれば、世が立たぬ。金は大事だ。大事なものゝ殖えれば、寐る間も心配だらう。閣僚の肩は、數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。旨い物も食はねば惜しい。少し食へば飽きたらぬ。存分食へば、後が不愉快だ。余の考がこゝまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏みそこなつた。平衡を保つために、すはやと前に出した左足が、仕損じの埋合せをすると共に、余の腰は、工合よく方三寸ほどな岩の上



大正三年甲寅十一月宮下
深居碧堂漱石



机に蕉坐稿つる
玉峰 漱石の筆
大正三年十一月漱石

筆 石 漱 目 夏

におりた。
肩にかけて繪の具箱が腋の下から躍りだしただけで、幸に何の事もなかつた。
立上る時に、向ふを見ると、路から左の方に、馬尻を伏せたやうな峯が聳えて居る。杉か檜か分らないが、根元から頂まで、悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤く、だんだんに棚引いて、つゞき目が確と見えぬ位、霧が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんできて眉に逼る。禿げた側面は、巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ、はつきりしてゐる。行く手は二町程で切れてゐるが、高い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら、左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平かにしても石は平かにならぬ。石は切碎いても岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を譲る氣色はない。向ふで聞かぬ上は、乗越すか、廻らなければならぬ。巖のない處でさへ、歩きよくはない。左右が高くて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと謂はんより、川底を涉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅ではないから、ぶらぶらと七曲へかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤

に刺されて居た、まれない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕もない。長閑な春の日を、鳴盡し、鳴明し、また鳴暮さなければ氣が濟まぬと見える。其の上、何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに、形は消えてなくなつて、只聲だけが空の裡に残るのかも知れない。巖角は鋭く廻つて按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛揚つて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と揚る雲雀が、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も揚る時も、また十文字に擦違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

Shelley
(1792—1822)
人 英國の詩

春は眠くなる。猫は鼠を取ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只、菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いた時に、魂のありかゝ判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものゝうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つてかう愉快になるのが詩である。忽ちシエレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で、覺えた所だけ誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其の二三句のなかに、こんなものがある。前を見ては、後を見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。腹からの笑といへど、苦みのそこにあるべし。美しき極みの歌に、悲しさの極みの想籠るとを、知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に、神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲も多からう。それならば、詩人になるのも考へものだ。しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に、時々蒲公英を踏みつける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へ伸して、真中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと振りむいて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎮座して居る。暢氣なものだ。又考を續ける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦しみもない。菜の花を見ても、只嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英も其の通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。

かう山の中へ来て、自然の景物に接すれば、見るもの、聞くもの、白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。併し、苦しみのないのは、何故だらう。只此の景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならぬば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只此の景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬ此の景色が、景色としてのみ余が心を樂しま

せつ、あるから、苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力は、ここに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを仕通して飽きくした。飽きくした上に、芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少なからう。

何處までも世間を出る事が出来ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹な

採菊東籬下
晋の陶淵明の句

るものも、此の境を解脱することを知らぬ。何處までも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駆けあるいて錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも、無理ではない。嬉しい事に、東洋の詩歌は、そこを解脱したのがある。

採菊東籬下、悠然見南山。

只それぎりの裏に、暑苦しい世の中を、まるで忘れた光景が出てくる。垣の向に隣の人が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と、出世間的に、利害得失の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。深林人不知、明月來相照。

獨坐幽篁裏
唐詩選にある王維の詩

不如歸

徳富蘆花の作
金色夜叉

尾崎紅葉の作
桃源

秦の亂を避けた
人の隠れた村と
いふ

支那湖南省湘潭
の近く

王維

盛唐の詩人
(一五九—四九)

淵明

陶潜の字
晋の詩人隱逸
(三六一—四二)

ファウスト
ゲーテの作

ハムレット
シェクスピアの作

Hamlet
シェクスピアの作

只二十字のうちに、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功徳は、不如歸や、金色夜叉の功徳ではない。汽車、汽船、權利、義務、道徳、禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却して、ぐつすり寐込む様な功徳である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も、詩を読む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ／＼暢氣な扁舟を浮べて、此の桃源に溯るものはない様だ。余は、固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を、今の世に布教して廣げようと云ふ心掛も何にもない。只自分には、かう云ふ感興が、演藝會よりも、舞踏會よりも、樂みになるやうに思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも、有難く考へられる。かうやつて只一

人、繪の具箱と三脚几を擔いで、春の山路をのそく歩くのも全くこれが爲である。淵明・王維の詩境を、直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願、一つの酔興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情は、さう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も、好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寝た男でもなからう。矢張餘つた菊は花屋へ賣つて、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かういふ余も其の通り、いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山の中へ野宿する程、非人情が募つては居らぬ。こんな處でも人間に逢ふ。ちんく端折りの頬冠や、赤い腰巻

那古井
假設の地名であ
らう

阿部次郎
哲學者
東北帝國大學教
授
文學博士
明治十六年山形
縣生

の姉さんや、時には、人間より顔の長い馬にまで逢ふ。百萬本の檜に取圍まれて、海面を抜く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭は、中々取れない。それどころか、山を越えて、落ちつく先の今宵の宿は那古井の溫泉場だ。(草枕)

四 天才と凡人

阿部次郎

天才の本質を能力の強さと大きさに置かず、人生の祕奥に貫徹する力の深さに置く時、天才と凡人との關係は獅子と羊との對照にあらずして、導師と法弟との關係となる。更に天才と凡人とを、試練と苦勞とに喘ぐ人間共通の運命に照し出す時、彼等は溫情を以て涙と笑とを分つ可き兄弟として、能力の大小強

五ノ九ノ九

弱による相互の墻壁を撤する。

凡人が天才の出現を翹望するは、彼が彼等を代表して更に奥深い世界を開く可き鍵を握つてゐることを信ずるからである。従つて深く人類の惱みとあこがれとを體得して、人類全體の問題を一身に擔ふ者でなければ此の翹望に答へることが出来ない。自己の未熟を鞭うつかはりにその優越の意識に耽溺し、弱小なる凡人を救済するかはりに之を嘲笑して自ら高しとする様な者は、反抗には値しても決して崇敬には値しない。

如何なる天分を有するかは何處に往く可きかの先決問題である。従つて天分の性質は各個人にとつて必然の問題である。併しその天分の大小強弱は各個人にとつて前者と同様の必然性を持つ問題ではない。人が「或もの」として生れて來たかぎり、

その天分の大小強弱如何に拘らず、當然その天分の性質によつて働いて行かなければならぬ不安を植付けられてゐるからである。その不安の衝動力が生々と作用する限において、常により大きく、より強くなつて行くことが出来る筈だからである。自己開展の極限はその極限に到達して見なければ本當にわかる筈がない。その極限を性急に見極めなければ氣がすまないのと、極限の問題を度外に附して、現在の衝動力に信賴することが出来るとは、各個人の性格の差別であつて、一切の人に通ずる必然の問題ではない。

天才は凡人に比して遙かに偉大なる事に堪へる。故にその用に就いて云へば凡人が天才の下位にあることは勿論である。従つて社會的又は人文史的見地より見る時、天才が殆ど一切な

るに反して、凡人は殆ど零に近いのは已むを得ない。天才の衷に實現せらるゝ世界が、凡人の慘憺たる勞苦によつて獲得せる世界に比して、遙かに豊富に、遙かに深遠に、遙かに自由に、遙かに精采あることは言ふまでもない。故にその世界の價値に就いて言へば、凡人の世界が天才の世界の下位にあることは勿論である。天才は下瞰して與へ、凡人は仰視して受ける。自然の世界に於て大小強弱の對照が儼存することは洵に已むを得ない。

或人がなし得る所を或人はなし得ない。或人が到達し得る所に或人は到達し得ない。故に或事をなし得るか得ないか、或點に到達し得るか得ないかを主要問題とする時、各個人の天分はその性質に就いて問題となるのみならず又その大小強弱に就

いて問題となる。此の方面から見れば、各個人の價値は殆ど宿命として決定されてゐることは否むことが出来ない。併し觀察の視點を外面的比較的の立脚地より内面的絶對的の立脚地に移し、成果たる事業の重視より追求の努力の誠實の上に移し、天分の問題より意志の問題に移すとき、吾人の眼前には忽然として新なる視野が展開する。從來如何ともすべからざる對照として儼存せしものは容易に融和する。さうして一切の精神的存在は同胞となつて相くつろぐ。此の世界にあつては各の個人がその與へられたる天分に従つてそれ〴〵彼自身の價値を創造するのである。さうして此の創造によつて「人間」としての意義を全くするのである。

内面的絶對的見地よりすれば、三尺の竿を上下する蝸牛は、千里

を走る虎と同様に尊敬に値する。さうして虎は蝸牛を輕蔑することのかはりに、千里の道を行かずして休まんとする自己を恥づる。蝸牛はその無力に絶望することのかはりに、三尺の竿を上下する運動の中にその生存の意義を發見する。

(三太郎の日記)

宇多の松原
土佐國香美郡岸
本村田町の邊か

紀貫之
歌人

文章家
古今集の撰者

天慶九年(200)
卒

八日
承平五年正月

同じ處
土佐國大湊
大湊は浦戸灣の
入口の邊か

五 宇多の松原

紀 貫 之

八日、さはる事ありて、なほ同じ處なり。今宵の月は海にぞ入る、これを見て、業平の君の、山のは逃げて入れずもあらなんといふ歌なむおぼゆる。もし海邊にて詠まゝしかば、波立ちさへて入れずもあらなむと詠みてましや。今この歌を思ひ出でて、ある

人の詠めりける。

照る月の流るゝ見れば、天の川

出づるみなとは海にざりける

とや。

九日、つとめて大湊より那波の泊を追はむとて漕出でけり。これかれ互に「國の境の内は」とて見送りに來る人數多がなかに、藤原信實・橋季衡・長谷部行政等なむ御館より出で給ひし日よりここかしこに追來る。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志はこの海にも劣らざるべし。これより今は漕離れてゆく。これを見送らむとてぞ此の人どもは追來ける。かくて漕行くまに、海のほとりととまるとも遠くなりぬ、船の人も見えずなりぬ。岸にもいふことあるべし、船にも思ふことあ

那波の泊
土佐國安藝郡奈
半利のあたり

れど、かひなし。かゝれば、この歌を獨言にしてやみぬ。
思ひやる心は海をわたれども、

ふみしなければ、知らずやあるらむ。

かくて宇多の松原を過ぎゆく。その松の數、いくそばく、幾千年
經たりと知らず。本ごとに波打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。
おもしろしと見るに堪へずして、船人の詠める歌、

見渡せば、松のうれごとに住む鶴は、

千代のどちとぞ思ふべらなる。

とや。この歌は處を見るに、えまさらず。かくあるを見つゝ、漕
行くまに、山も海もみな暮れ、夜更けて西東も見えずして、て
けのこと、楫取の心に任せつ。男も習はぬはいとも心細し、まし
て、女は船底に頭をつきあてゝ、ねをのみぞなく。かく思へど、舟

子楫取は船歌うたひて何とも思へらず。その歌ふ歌、

春の野にてぞ音をばなく。

わが薄にて手をきるゝ、摘んだる菜を、

親やまほるらむ、姑やくふらむ。かへらや。

よんべのうなるもがな。錢乞はむ。

虚言をして、おぎのりわざをして、

錢も持て來ず、おのれだに來ず。

これなみに多かれど、書かず。これらを人のわらふを聞きて海
はあるれど、心は少しなきぬ。かくゆきくらして、泊に至りてお
きなびと一人たうめ一人あるがなかに、こゝちあしみして、物も
ものしたまはてひそまりぬ。(土佐日記)

六 うたひもの

神樂

劔

本

しろがねの 目貫の太刀を 下げ佩きて、
ならの都を ねるは誰が子ぞ、 ねるは誰が子ぞ。

末

いそのかみ ふるやをとこの 太刀もがな、
くみのをしでて 宮路通はむ、 宮路通はむ。

葦

本

ふる
大和國石上布留
神社
虎にのり古屋を
こえて青淵にみ
づちとり來む劔
太刀もが(萬葉
集)

葦の ねたさ、うれたさや、 御園生にまゐり來て、 木の根を
ほりはんで、 おさまさ、 角折れぬ、 おさまさ、 角折れぬ。

末

ねたさ、うれたさや、 御園生にまゐり來て、 木の根を掘りは
んで、 おさまさ、 角折れぬ。

催馬樂

飛鳥井

飛鳥井に 飛鳥井に やどりはすべし、 おけ、 かげもよし、
かげもよし、 みもひも寒し、 みまくさもよし。

老鼠

西寺の 老鼠、 若鼠、 おんもつんづ、 袈裟つんづ、 袈裟つ
んづ。 法師に申さむ、 師に申せ。 法師に申さむ、 師に申せ。

今様

法華

生死の大海ほとりなし。佛性眞如岸遠し。
妙法蓮華は船筏。 來世の衆生渡すべし。

いけのすどしき
みぎには、な
つのかげこそな
かりけれ、こだ
かきまつをふく
かぜの、こゑも
あきとぞきこえ
ぬる

本版抄秘塵梁

子供

あそびをせむとや生れけむ。 たはぶれせむとや生れけむ。
遊ぶ子供の聲聞けば、 我が身さへこそゆるがるれ。

四季

慈鎮

慈鎮

天台座主
關白藤原忠通の
子慈圓
愚管抄の著者
嘉祿元年(一一八五)
卒
年七十一

春の彌生の曙に

四方の山邊を見渡せば

花ざかりかも白雲の

かゝらぬくまぞなかりける。

花橘も匂ふなり。

軒のあやめもかをるなり。

夕暮さまのさみだれに

山時鳥なのるなり。

秋のはじめになりぬれば、

今年も半ばは過ぎにけり。

わがよふけゆく月かげの

かたぶく見るこそあはれなれ。

冬の夜寒の朝ぼらけ、

契りし山路は雪ふかし。

心のあとはつかねども

思ひやるこそあはれなれ。

朗詠

螢

元稹

螢火亂れ飛んで秋已に近し、
辰星早く没して夜初めて長し。

元稹
唐の詩人
白樂天の親友
太和五年(八三二)
歿
年五十三

源順
平安朝の和漢學
者
和名抄の著者
後撰集の撰者
永觀元年(六四〇)
卒
年七十三

陳蔡
陳は支那の河南
省陳州
蔡は支那の河南
省汝寧府上蔡縣
共に春秋時代の
小國で後楚に滅
された

開三孔子在二陳蔡
之間三楚使三入聘
三孔子三陳蔡太
夫謀曰三陳蔡
用三於楚三則陳蔡
用三事大夫危矣
於是乃相與發三
徒役三圍三孔子於
野三不得三行
絶三糧三從者病
莫三能興三孔子
講師絃歌不三衰

松

源順

九夏三伏の暑き月には竹錯午の風を含み、
玄冬素雪の寒き朝には松君子の徳を彰す。

七 陳蔡の野

安藤 圓 秀

同じ朝であつた。

「かうして當ても無く野原の森の一軒家に立て籠つて居ても、
何時埒が明くとも想像が出来ない。少し遠過ぎて楚の昭
王に面會して救の人数を乞ふより他に手段はあるまい。そ
れには自分が何とか圍みの者の目をかすめて、此の急場を切
り抜けよう。」

孔子知三弟子
有二懼色(史記)
安藤圓秀
東洋哲學者
東京帝國大學助
教授

子貢
端木賜の字
衛の人

孔子の門人
辯説に長じ又貨
殖に巧であつた
孔子より三十一
歳若い

かう考へた子貢は、壊れ家ながら一番奥座敷に座を構へてゐる
孔子の前へ出て行つた。

「先生。」

「お、賜か。」

「斯うして毎日々々不安な日を送つて居ましても、致方が御座
いませんでせう。」

「さうさのう。」

「私達は兎も角として、先生さへ碌々召上り物も無い様な始末
で、私はじつとして居ることが出来なくなりました。」

「困つたのう。」

「先生は泰然としていらつしやいますけれど、若い者達は御覽
の通りすつかり意氣銷沈して了つて居ます。」

楚
支那の揚子江の
中流湖北湖南あ
たりの地
戦國七雄の一
昭王
孔子を用ひよう
とした楚王

「さうであらうとも。」

「今も私はつくづく考へましたのですけれど、楚の昭王にお目に懸つて、救の人数を出して戴くより、他に方法があるまいと思ひます。」

「ふむ。」

「圍みは相當に嚴重の様でありますけれど、何とかして抜け出して行かれようかと思ひます。」

「其許が往つてくれる考があるかな。」

「え、其の事で先生に御相談に上つたのです。私參ります。」

「きつと使命を果す心算で御座いますから、私をお遣はし下さいませんか。」

「楚までは随分遠いで。」

「なに、圍みさへ出ますれば、後は駿足を驅つて往けばそれ程でも有りませう。」

「さうか。それでは一つ往つて貰はうか。俺のことは心配せいでよい。唯俺は若い其許達が食ふや食はずに居るのを見ると、氣懸りに堪へぬのぢや。御苦勞だが、皆の爲ぢや。往つて貰ひませう。其許なら大事なく目的が果せるだらう。」

「承知致しました。今日早速其の準備を致します。」

「氣を付けてな。萬一の用心をして往かねばなりませんぞ。」

「大丈夫で御座います。」

「それにしても、のう、賜や、俺は其許に尋ねて見たいことが有るのぢやが。」

「何で御座います。」

其許遠

顔淵子貢子路な

兕にあらす

兕は野牛の一角で青色なもの。子貢入見。孔子曰、賜、詩云、匪兕匪虎、率彼曠野。吾道非邪。吾何於於此。子貢曰、夫子之道至大也。故天下莫能容夫子。夫子蓋少貶焉。孔子曰、賜、良農能稼、而不不能爲禱。良工能巧、而不不能爲禱。君子能修其德、而不可能之、統而理之、而今爾不修其德、而求其能容、賜而志不遠矣。子貢出。顔淵入見。孔子曰、回、詩云、顔回曰、夫子之道至大。故天下莫

「俺も永らく道を説き廻つて来たが、一向現代の社會に反響が無い。たま／＼俺の意見も受け容れて、國家社會の改造を企圖してくれられた君主方もあつたが、どれも／＼皆不徹底に終つて了つてゐる。初めは乗り氣になつてかゝつても、少し遣ると、すぐ倦んでしまふ。」

「左様でございます。」

「それだけならよいが、其許の承知の通り、絶えず壓迫や妨害を蒙つて——それも俺が苦しむばかりで無く、其許達も一所に難澁する始末ぢや。兕にあらす虎にあらず、かの曠野に率ふと昔の詩人が歌つたが、斯うした虐げを受けるのをつく／＼考へて見ると、俺の説く道が間違つて居るのであらうかの。何とおつしやいますか。私は決して先生の御説きなさる道

が誤つてゐるなどとは露程も考へません。」

「それなら、何故世間から受け容れられないので有らうかの。」

「それは先生の御説きなさる道が大き過ぎるから有ります。」

現代の様な何事も功利づくめの世間の人達には解しかねる

のであります。先生の道の世界と俗世間とは餘りに距離が

有り過ぎます。」

「ふうむ。」

「古から高遠な理想は俗耳に縁遠いものと思はれます。私は思ひまするのに、今少し先生が妥協的に調子をおろして御説きになつたら、世間も受け容れる様にならうかと存じます。」

孔子は此の言葉を聞くと、じつと子貢の顔を見詰めて暫く黙つ

て居たが、やがて、

能容。雖然夫子推而行之。不。容何病。不。容然後見。君子。夫道之不。修也。是吾大。修而不。用。是。有。國者之。醜也。不。容何病。不。容然後見。君子。孔子欣然而笑曰。有。是。哉。顔氏之。子。使。爾。多。財。吾。爲。爾。宰。於。是。四。子。貢。至。楚。楚。昭。王。與。師。迎。孔子。然後得。免。

(史記)

「賜や、其許は本當にさう思ふかの。」
急に力の籠つた儼然たる聲で言ひ切つた。子貢は心の中に一
種の壓迫と不安とを感じ出した。

「……………」

「どうぢや。」

念を押す様に疊みかけられた時に、子貢は返辭が出来なかつた。
今言つた自分の言葉に對する自信が、咄嗟の中に霧のやうに消
えて了つたからである。

「……………」

「のう、賜や。植付けが良く出来てもきつと良い收穫を期待す
ることは出来ぬものぢや、風も吹かうし、雨も降らうし、さうで
は無いか。」

「はい。」

「又どんな上手な細工人の造つた品物でも、きつと人の氣に入
るといふことは保證の出来ぬものぢや。」

「はい。」

「解つたかな——俺達が履んでゆく道も、必ず現代に受け容れ
られるとは限つて居らぬ。世間の人達が認めてくれぬから
というて理想を下げて妥協的な態度に出ようとする其許の
考は誤つてゐる。」

「はい。」

「今の様な苦しい環境に立つと、兎角人間は妥協し易いものぢ
や、金剛不壞の信念が無いと思はず苦し紛れに横道へ走りた
いのが弱い人間の心ぢや。」

「私の足りない心から、淺はかなことを申し上げました。」

「いや、ともすると妥協どころでは無い、道に對する疑さへ懐く者がある。其許もこれからぢや。俺も其許の年頃には、色々と惑うたこともある。其許も今年はもう三十ぢやのう。」

「はい。」

かうしたあわたゞしいさすらひの圍みの中に在りながら、何かと不斷に教へ導いてくれる師の親切が、子貢の胸には言ひ様の無い有難さを味はして、思はず感激の涙さへ催すのであつた。

「先生、有難うございました。今更ながら道の尊さを身に沁みて感じさせて戴きました。有難う御座いました。」

「お、さう無くてはならぬ。」

「それでは先生、早速今日楚の方へ參ることに致しまする。」

「あ、よくよく氣を付けて往つておくれ其許が出掛けてくれたら皆の者も安心するだらう。——だが決して無理をせぬ様にな。何事も天に任せて——。」

「はい。どうぞ先生もお氣を付け下さいますやうに願ひます。子貢は元氣好く孔子の座から退いた。孔子は遠く使用する若い弟子の健氣さを喜びながら、懐かしげに其の後姿を見送つてゐた。

「やつとこれで安心した。もう四五日の辛抱だ。」

「こんなことなら、早く誰か楚へ行けばよかつた。」

「だつて初めから陳・蔡の者共が是程根強く邪魔するとは思へなかつたからね。」

「本當だ。陳・蔡の奴等も妙にけちなことをしたものだ。」

「しかし、楚の昭王はすぐ人數を寄越してくれるだらうか。」

「それは繰出すさ。先生に對する義理にも出すに定まつてる。」

「それにあの子貢さんがあの辯舌で説いた日には、誰だつて動かされるよ。」

「やれ〜。少し氣が樂になつたら、急にひもじい思がして來た。」

「本當にねえ。何か無いかな。」

「駄目だよ。藜のお汁すらやつとのことの此の頃だもの——。」

「御飯が——ぼつぼと湯氣の立つ様な御飯が食べて見たいな。」

「そんな贅澤は言はないこと、言はないこと。」

子貢が楚の國へ出立してからは、若い弟子達は急に元氣附いて、二三人會つてはわけも無い談合に耽り勝ちであつた、其の中で

も一番口のにぼるのは食物の話であつた。

食物談のはづんだ後は——絞めつけられる様な空腹さを感じながらも——餓鬼のやうな自分達の心を恥かしく思ふ程、それ程眞剣な身の入れかたであつた。

「昨夜ね、灸り立ての肉をさん〜貪り食つた夢を見て、目が覺めたら舌がこはゞつて居たよ。」

「おいしさうな餅がね、大鉢に盛り上げてあるので、手を出して取らうとすると、鉢が段々彼方あちの方へいつて了ふ。追つかける様に手を延しても、どうしても鉢へ手が届かない。焦れば焦る程鉢が逃げていくぢやないか。自暴いになつて飛びかゝらうとした所で夢が覺めちやつた。」

こんな話も聞かれた。

顔淵

名は回
魯の人
孔子の高弟
清貧にして道を
樂しむ
孔子より三十八
歳若かつた
三十二で天死

「君達の話はまだ罪が無いが、僕は今朝曉方に自分ながら情無い夢——夢だか幻だか解らないが、自分の魂の醜さをすつかり見せつけられたよ——それはね、他人の食べて居る食物を奪はうとして命懸に闘争して居たんだよ。本當に野性のままだに解放されたら、かうもなるものかと、自分が恐しくなつた。こんなことを告白して寂しさうに首俛れた若者もあつた。危難から免れんとする不安が稍薄らいで、胃袋の不満が動搖の中心となつて來た。そして一日は一日より其の濃度を進めていく。」

斯くて晝は夜に、夜は曉へと遷つて行つた。

疲れた中から禮を講じ終へた孔子は、同じくひよろ／＼になつた弟子達と一所に退席する顔淵を呼び止めてまた坐らした。

「回よ、其許の身體には異状は無いかな。」

「はい。お蔭さまで一向變りも御座いません。」

「それは結構ぢや。其許は平生餘り丈夫な方では無いから、氣をつけなさい。さぞ苦しからうのう。」

「いえ、左程ではありません。先生は如何て御座いますか。お元氣のやうに御見受けは致して居りますけれど。」

「なに、俺は大丈夫ぢや。賜がわざ／＼楚まで往つてくれたから、もう暫くの辛抱だらう。随分皆に苦勞を掛けるので、氣の毒に思つてゐるのぢや。」

「勿體無い。其の様な御心勞は御無用に遊ばして戴きたうございます。」

「したが、回よ、其許はどう思ふかの。」

先に子路と子貢とに問うた同じ言葉を繰返した。「匪虎匪虎、率彼曠野」。顔淵は今更の様に詩の句を心の中で味はつた。而して成程、現在自分達の境遇には是程適切な言葉は無いと思つた。しかし何の爲に師がこんなことを言ひ出されたのか、解しかねて、そつと孔子の様子を窺つた。

孔子の顔には返辭を待ちわびる色が見えた。

顔淵は返辭に迷つた。

「俺の信奉する道に不合理な所があるであらうかの。」

「いゝえ、決して——」。

顔淵はきつぱり言ひ切つて、

「先生の御説きになる道は、今の世間に受け容れられるには餘り大き過ぎます。現代の人々には先生の高遠な理想は領會

出来ませんでせう、いや出来ないのみではありません。先生の高唱せらるゝ純眞至上の道は、現代功利の徒に取つては大痛棒であります。殊に生民の血肉を啖ふ當路の人たちには致命的打撃であります。先生への反抗も暴逆も、彼等阿諛迎合免れて恥無き輩の、自家防禦の反映であります。——假令それが明確な認識の上から行はれないとしましても、小人輩は自分等の利害の上には、鋭い直感を持つてゐます。

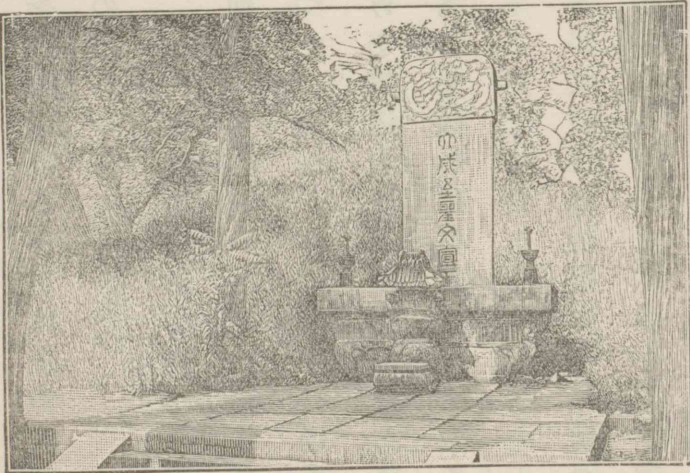
しかし先生。——本當に獸の様に——いや獸は到る處に餌を得る自由を持つてゐます。——其の自由すら奪はれた獸の様に、かうして曠野をさまよひ歩く残酷な運命に虐げられながらも、先生が一切の妥協を棄て、直進せらるゝことを私は深く信じて居ます。どうぞ先生。一層勇敢にお進みを願ひま

す。私は先生の不退轉の御精進を力として、先生の御後に跟いて参りたいので御座います——。

孔子の顔には晴やかな微笑が浮んだ。顔淵は沈痛な聲で尙も語を續けた。

「先生、現代の世間が先生を容れ得ないのは眞に現代人の恥辱であります。現代に容れられないことが何の氣遣ひになりませう。寧ろ現代に受け容れられない者にして、始めて眞に道を求むる者なることが證明せらるゝのであります。あゝ、呪はしい現代の墮落——やがては彼等にも先生の導きによつて暗黒から目覺める時の來ることを切に冀つてゐます。先生。私はどんな横逆な陷穽の中に在つても、身命を擲つて道に殉ずる確信を持つてゐます。どうぞ——一層私を高め

る様に鞭うつて下さい。



孔子の墓

合せて居たが、やがて二人の目は涙にぬれて來た。

殉教者のみが持つ様な顔淵の熱い感激の瞳には、涙さへ滲む隙がない。

孔子は思はず寄り添うて、顔淵の手をしつかり握つた

「回よ、おう、其許なればこそ。

……

漸く老いんとする一代の聖者と其の若い愛弟子とは意味深い沈黙のまま、暫く互に顔を見

巧に圍を抜け出して、楚昭王に救の人数を派遣することの約束を成し遂げた子貢は、此の吉報を齎す爲に夜を日に繼いで曠野の中の一行へ急いだ。」

「待てよ、此の機會に何か食糧を得て往かう。」

何事にも心利いた彼は、持ち合はせた金で提げ得る限の米を買った。纔か一斗ばかりに過ぎないが、圍の兵の目を掠めて是だけを持込むことは容易ならぬ苦心である。しかし七日も食ふものを缺いて飢ゑ續けて來た一行の者の歡喜する顔を想像すると、さして苦しくも思へなかつた。

やがて彼が綿の様に疲れ切つた身體を森の小屋へ運び着けた時、半病人の様な従者や弟子達は急に生き返つた様にいそぐと子貢を迎へ劬つた。

歡びの聲は暫し森の孤屋を揺り動かした。

底知れず落着いてゐる孔子の顔にも、抑へ切れぬ安心の微笑が漂うて、心から子貢の働を賞讃し、幾度も感謝の言葉を繰返へした。

殊に子貢の齎した一斗の米は、其の一粒一粒が崑崙の寶よりも尊い値のものに思はれた。(孔子と其の徒)

ハ 枕草子抄

清少納言

春は曙

春は曙 やうく白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、

清少納言

平安朝の文學者

枕草子の著者

肥後守清原元輔

の女

一條天皇の皇后

藤原定子に仕ふ

炭櫃
圓燈裏
火桶
圓火鉢の類

宮
一條天皇の皇后
藤原定子
關白道隆の女
叔父道長の女
子が中宮となつ
てから失意
年二十五で早世

此の君

闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕暮。夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはて、風の音、蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて、雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして炭もて渡るも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

五月ばかりに、月もなくいと暗き夜、女房やさぶらひ給ふ。と、聲々していへば、宮出でて見よ。例ならずいふは誰ぞと仰せらるれ

吳竹

淡竹

この君

王儂之字子猷：
昔借居空宅、便
令栽竹。或問
之。儂之指竹
曰、何可三、日
無此君邪。(世
説)

頭辨

辨官で藏人頭に
任ぜられたもの

職

皇后宮職

藤原行成

御前の竹

清涼殿の前の吳
竹

この君と稱す

晉騎兵參軍王子
猷裁而稱此君
唐太子賓客白樂
天愛爲吾友。
(朗詠集、菅原篤
茂)

ば、出でて、誰こは誰ぞ。おどろくしうきはやかなるは。といふに、ものもいはで、御簾をもたげて、そよろとさし入るは、吳竹の枝なりけり。漚おい。この君にこそ。といひたるを聞きて、いざや、これ殿上に往きて語らむ。とて、中將、新中將、六位どもなどありけるは、往ぬ。頭辨はとまり給ひて、怪しくいぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌よまむとしつるを、職にまゐりて、同じくは女房など呼び出でてを。といひて來つるを、吳竹の名をいとくいはれて、往ぬるこそをかしけれ。たれが教を知りて、人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ。などの給へば、漚竹の名とも知らぬものを、なまなめしとや思しつらむ。といへば、まことぞ。え知らじ。などの給ふ。まめごとなどいひあはせて居給へるに、殿上人、この君と稱す。といふ詩を誦じて、また集り來れば、頭辨、殿上

上
一條天皇

左衛門の陣
建春門の内

にていひ期しつる本意もなくては、など歸り給ひぬるぞ。いと怪しくこそありつれ。とのたまへば、殿上人たむらひさる事には、何のいらへをかせむ。いとなか／＼ならむ。殿上にてもしひのゝしりつれば、上も聞しめして、興ぜさせ給ひつる。と語る。辨もろともにかへす／＼同じことを誦じて、いとをかしがれば、人々出でて見る。とり／＼に物どもいひかはして歸るとて、なほおなじ事をもろ聲に誦じて、左衛門の陣に入るまできこゆ。つとめて、いとく少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、この事を啓したれば、しもなるを召して、宣のたまさる事やありし。と問はせ給へば、普た知らず。何とも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣の取りなしたるにや侍らむ。と申せば、取とりなすとて、と打ち笑ませ給へり。誰が事をも、殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さいはるゝ

人をよろこばせ給ふもをかし。

にくきもの

いそぐ事ある折に、長言するまらうど。あなづらはしき人ならば、後に、などいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯すずりに髪の入りに磨られたる。又墨の中に、石いしこもりて、きしく／＼ときしみたる。俄かにわづらふ人のあるに、驗者けんしや求むるに、例ある處にはあらで他ほかにある、尋ねありくほどに、待遠まちとほに久しきを、辛うじて待ちつけて喜びながら加持せさするに、この頃物のけに困じにけるにや、居るまゝにすなはち、ねぶり聲になりたる、いとにくし。なんでふことなき人の、すゝろにえがちに物いたういひたる。火桶炭櫃などに、手の裏打返し、皺押延べなどしてあぶり居る者。いつかは若やかなる人などの、

加持
病氣災難等を攘
ふ爲に佛力の加
護を祈る咒法

えがち
心得がほ

ひろめき
廣めきか
狩衣
もとは狩獵の時
の布衣
當時は絹で製し
六位以上の常服
式部の大夫
五位の式部大丞
駿河の前司
前駿河守
あめき
わめき

さはしたりし。老いばみうたてあるものこそ、火桶のはたに、足をさへもたげて、物言ふまゝにおしすりなどもすらめ。さやうの者は、人のもとに來て、居むとする處を、まづ扇して、塵拂ひすて、居も定まらずひろめきて、狩衣の前、下様にまくり入れても居るか。かし。かゝる事は、いひがひなき者のきはにやと思へど、少しよろしき者の式部の大夫、駿河の前司などいひしがさせしなり。また酒飲みてあめき、口をさぐり、髻あるものはそれを撫でて、盃人に取らするほどのけしき、いみじくにしと見ゆ。「また飲め、などいふなるべし。身ぶるひをし、頭振り、口わきをさへ引き垂れて、童べの、國府殿こくふどのに參りて、など謠ふやうにする。それはしも、まことによき人の、さし給ひしより、心づきなしと思ふなり。物羨みし、身の上嘆き、人の上言ひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞

伊豫簾
伊豫國浮穴郡か
ら出る細い篠で
編んだすだれ
帽額の簾
上部に水引のあ
る縁取の精製の
簾
遣戸
横にあける引戸
たをめかし
揃まし
こほめく
ことごとくと音す
る

かまほしがりて、言ひ知らせぬをば、怨じ譏り、又、わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、他人ひとにも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かむと思ふほどに泣くちど。鳥の集まりて飛びちがひ鳴きたる。伊豫簾など懸けたるをうちかづきて、さら〜と鳴らしたるもいとにくし。帽額かぶかの簾はましてこはき物の打置かるゝ、いとしくし。それもやをら引上げて出で入りするは、更に鳴らず。また、遣戸など荒く明くるも、いとにくし。少し擡ぐるやうにて明くるは、鳴りやはする。悪しう明くれば、障子しょうじなどもたをめかし、こほめくこそしるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。きしめく車に乗りてありく者、耳も聞かぬにやあらむと、いとにくし。

さいまくる
才がる

あからさまに
かりそめに

誦文する
呪文を唱へるこ
と
クサメは即ちそ
の呪文の一

わが乗りたるは、その車の主さへにくし。
物語などするに、差出でて、我一人さいまくる者。すべてさし出
では、童も大人も、いとにくし。昔物語などするに、わが知りたり
けるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠の走り
歩くいとにくし。あからさまに來たる兒ども、童べをらうたが
りて、をかしき物など取らするにならひて、常に來て居入りて、調
度や打散しぬるにくし。家にて、宮仕所にて、逢はでありな
むと思ふ人の來るに、空寐をしたるを我許にある者どもの、起し
寄り來ては、寐ぎたなしと思ひ顔に引き搖がしたる、いとにくし。
今參りのさし越えて、物知顔に教へやうなる事いひ、後見たる、い
とにくし。はなひて誦文する人。おほかた家の男主おぢならでは、
高くはなひたる者、いとにくし。蚤もいとにくし。衣のしたに

躍り歩きてもたぐるやうにするよ。また犬のもろ聲に、長々と
鳴きあげたる、まがくしくにくし。めのとの男こそあれ。女
はされど、近くも寄らねばよし。をのこ兒をば、たゞわが物にし
て、立ちそひ領じてうしろみ、聊かもこの御事に違ふ者をば、讒し、
人をば人とも思ひたらず、怪しけれど、これが咎を心に任せて言
ふ人もなければ所得、いみじきおも、ちして、事を行ひなどする
よ。(枕草子)

九比良の山風

五十首歌奉り〜中に

宮内卿
後鳥羽天皇の宮
女
元暦ごろの人

寂蓮
俗名藤原定長
もと俊成の養子
建仁二年(八六二)
寂
年未詳

藤原家隆
宮内卿
俊成の門人
嘉禎三年(八七七)
薨
年八十

湖上花を

宮内卿

花ささよふ比良の山風ふきにそり

こぎゆく船のあと見ゆるまで
五十首歌なりし時 寂蓮法師

言水てゆく春のみなよこし知らぬも

お霞下りおつる宇治のうば舟
藤原家隆朝臣

つるふせむ来ぬおあまのこの杜鶴
待ぐらとおりば村雨のそら

西行法師
俗名佐藤義清
建久元年(八五〇)
寂
年七十三

題知ろず

西行法師

心あしつらにもあそれを志うれそり

しぎたつ津乃林のゆさをま

五十首歌なりし時 攝政左大臣

くもさ清きこもけさる秋のせを

杉下りのしづか月城にんそ哉

百首歌なりし時 藤原家隆朝臣

駒とめて袖うち拂ふこぼしな

さそらけりたるの雪の夕言

藤原定家
俊成の子
中納言
仁治二年(九〇三)
薨
年八十

攝政太政大臣
藤原良經
建永元年(八六〇)
薨
年三十八

俊成
藤原氏
五條三位と稱す
元久六年(八八四)
薨
年九十一

幸田露伴
文學者
文學博士
名は成行
慶應三年(三五七)
江戸生

室家朝多母身ありし後秋の
ころ墓所近き堂にとりてよみそ
侍りて候
皇太后宮大夫俊成

まはりしあるおもしろかなも松風を
しるすや若のしはふきくむ

一〇 大丈夫の覺悟

幸田露伴

大丈夫苟も身を學藝に委ねんとせばまづ受發の二途に於て大
丈夫の覺悟あるを要す。發とは外に内の發するなり。受とは
内の外に受くるなり。受くることは須く大海の百川を吞むが

如くなるべし、發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くな
るべし。受くることの多からざらんことを嫌ひて、川の大川の
小を嫌はず、發することの豊かならざらんことを恐れて、方の東
方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。
受くるに嫌ふところあり、發するに問ふところあるは、女兒の情
のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして實は一。受を
よくすれば發は其の中に在り。大賢は能く受く、中才は勉めて
克く受く、賤人は好んで受くるあり、敢へて受けざるあり。誓つ
て必ず賤人たらざらんを期する、之を眞に身を學藝に委ぬとい
ふ。受の途に於て工夫刻苦するものは學藝を成すに庶幾から
ん。受の途に於て大丈夫の覺悟なきものは、爲すにだに堪へざ

らんとす。何ぞ成ることあらん。

評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し、褒を愛して、毀を惡み、貶を惡む。是に於て、毀譽褒貶の我が頭上に加へらるゝや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒らに懼れ、或は徒らに驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜むべし、堂々たる六尺の身、他人に簸弄せられたるを悟らず。人を颺風にし、我を糝糠にす。實に自ら待つゝの薄きのみならず、抑、また學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈此の如くなるべけんや。夫れ大海の百川を呑む、大も亦呑む、小も亦呑む、清も亦辭せず、濁も亦辭せず。日に黙々たり、洋々たり、而して、漸く我が大を成し、徐ろに我が大を用ひ、日に活潑々たり、圓陀々たる大作用をなす。大賢の、人の言を受くる、亦是の如し。精雜密疎の説、毀譽褒貶の評、皆一齊に之

擊壤の歌

日出兮而耕、日入兮而息。擊壤井而飲、耕田而食。有_二於我_一帝力奚_レ帝王世紀_レ舜の詩
南風之薰兮、可_三以解_二吾民之愠_一兮、南風之時兮、可_三以阜_二吾民之財_一兮。(家語)

をして日に進ましむるあらんことを願はざる無し。古人まことに此の如し。則ち堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。擊壤の歌は誰か堯の徳を傷つくるものとなさん。舜の詩猶存すれども、誹謗の木

の文は今何處にかある。是の故に、學藝に志ある者は能く外に受くる大賢の如くなる能はずとも、勉めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疏は老婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。縦令、滿面の垢辱、堪へんとして堪ふる能はず、筋張り、血涌き、劍を抜いて直ちに報いんと欲するに至るとも、亦先づ牙關を咬定して、隱忍し、頭を垂れ、心を虚しくする工夫の裏より、一天地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲、馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期す

べし。之を大丈夫の受の覺悟といふ。

人貶すれば便ち受けずして胡言亂説し、人讚すれば便ち默受して欣々たる如きは、閨閣の兒女に在つては咎むべくもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。古に曰く、峻谷に入るものは當に葛藟を攀ぢて以て顛墜を免るべし、時俗に處るものは當に道義に據りて而して後以て自立するを得んと。學藝に遊ぶものは當に反求の功に頼るべし、漸く深造するあらん。唯反求の功に頼る、則ち揚げらるゝも自滿せず、抑へらるれば、愈奮ふに足らん。

徐子曰く、今夫れ、身を立つる、人の譽むる所とならずして、人の誇る所となるものは、未だ善をなす理を盡さざればなり。善をなす理を盡すものは、將に舜の若くならんとす。舜と同じからず

徐子
徐幹字は偉長
後漢の末、
魏の初の人、
中論の著者

五十にして
遠伯玉年至三五
十而知四十九
年之非。(淮南
子)

と雖も、其れ敢へて之を誇るものあらんや。故に語に稱す、寒を救ふは裘を重ぬるに若くはなし、謗を止むるは身を修むるに如くはなし。と。善いかな言や、能く大丈夫の覺悟を説けりといふべし。古人五十にして四十九を非とす。今、我、昨の我を是として後の我に望むなくんば、我の死するや久しからん。

大丈夫當に受發の二途に於て、大丈夫の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡すあるべし。子思曰く、能く其の心に勝つ、人に勝つに於て何かあらん。能く其の心に勝たず、人に勝つを如何せん。と。爲す所ありて美とせられず、内に求めずして人に責むる、其の情は憫むべし、其の爲は悲しむべし。我豈、人の勝つを好むを陋とするのみならんや、我また、實に之を愧づ。倣はんかな海や、百川其れ海を如何せん。(綱言)

松尾芭蕉

俳聖

伊賀上野生

元祿七年(三五四)

歿

年五十一

石山

近江國滋賀郡石

山村石山

岩間

石山村南郷

國分山

石山村國分にあ

る山

國分寺

聖武天皇天平十

三年ごろ諸國に

創建

翠微

謂て未及三頂上

在レ旁毘陀之處

山氣青緑色、故

名翠微。(爾雅

疏)

光を和げ

和其光(同一其

塵。(老子)

曲翠

芭蕉の門人

近江膳所生

二 幻住庵の記

松尾芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ると三曲二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和げ、利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣てざりければ、いと々神さび、物しづかなる傍に、住捨てし草の戸あり、蓬根笹軒をかこみ、屋根洩り、壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何がしは勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になんありしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残

五十年や近き身

元祿三年芭蕉四

十七歳

象潟

羽後國島根山の

西北麓名所

鳩の浮巢

かいつぶりが蘆

の枯巢などで作

つた葉

やがて出でし

吉野山やがて出

でしと思ふ身を

花散りなばと人

や待つらん

(西行)

吳楚東南に走り

昔開洞庭水、今

上岳陽樓。吳楚

東南拆、乾坤日

夜浮。……(杜

甫)

瀟湘洞庭

惠宗烟雨歸雁、

坐我瀟湘洞庭。

欲下喚三扁舟、歸

去上、故人道是丹

青。(黃山谷)

せり。予亦市中を去ること十年ばかりにして、五十年や、近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて、今年湖水の波に漂ひ、鳩の浮巢の流れ留るべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端ふきあらため、垣根結ひそへなどして、卯月の初め、いとかりそめに入りし山の、やがて出でしとさへ思ひそみぬ。さすがに春の名残も遠からず、躑躅咲きのこり、山藤松にかゝりて、時鳥しばく、過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥のつゝくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。山未申にそばだち、人家よきほどに隔たり、南薰峰よりおろし、北風海を浸して涼し。比叡の山、比良の高嶺より、辛崎の松は霞こめて城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠

笠取
山城國宇治郡笠
取村笠取
石山の西南三里

三上山

近江富士

石山の

東北六里

七峯

富士山

古人

猿丸大夫

墓は田上山の麓

にあるといふ

海棠に

徐老海棠集上、

王翁主簿峰庵。

(黄山谷)

とくくの雫

とくくと落つ

る岩間の苔清水

汲みほすほども

なきすまひかな

(西行)

取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞のたゞく音、美景物として足らずといふ事なし。中にも三上山は士峯の佛に通ひて、武藏野のふるきすみかも思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。なほ眺望隈なからんと、後の峰に這上り、松の棚づくり、藁の圓座を敷いて猿の腰掛と名づく。かの海棠の巢をいとなみ、主簿峰に庵を結べる王翁徐佺が徒にはあらず。たゞ睡癖山民となりて、屏顔に足をなげ出し、空山に風を捫つて坐す。偶、心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくくの雫を侘びて一爐の備いと輕し。はた昔住みけん人の殊に心高く住みなして、たくみおける物ずきもなし。持佛一間を隔て、夜の物を納むべき處など聊かし

高良山

後國三井郡高

良山神宮寺

甲斐何がし

藤木甲斐守教直

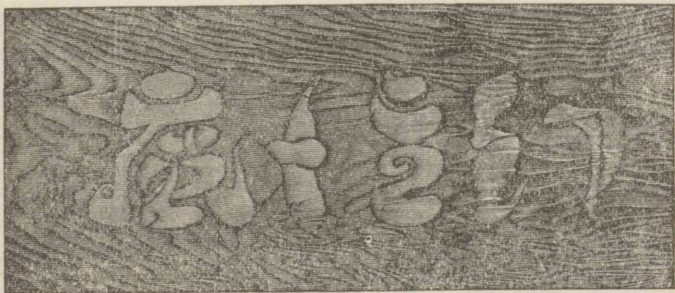
寛永時代の書家

慶安二年(1651)

歿

年六十八

つらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、賀茂の甲斐何がしが子にて、このたび洛に上りいまぞかりけるを、或人して額を乞ふ。いと易々と筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ旅寝といひ、させる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝は稀にとぶらふ人々に、心を動かし、或は宮守の翁、里のをのこども入來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に、日已に山の端にかゝれば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取つて



幻住庵の額

静かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取つて

岡兩
岡兩門、景日、龔子行、今子坐、今子起。(莊子)

樂天

唐の詩人白居易の號

會昌六年(836)歿

老杜

唐の詩人杜甫

太曆五年(755)歿

坪内逍遙

名は雄藏

英文學者

劇作家

文學博士

早稻田大學名譽教授

安政六年(1829)美濃國加茂郡尾張代官所生

は岡兩に是非をこらす。

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとはあらず。やゝ病身、人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つらつら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、この一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖處ならずやと思ひ捨て、ふしぬ。(猿蓑集)

三 長生新浦島

坪内逍遙

幕のうちで、次ぎの船唄に浪の音をかぶせて、遠く、だん／＼かすかになりゆくやうに歌ふ。

オヒツケへむかし思へば、うらめしうござる、なぜにむかしは、今ないか。

唄が切れると、幕があく。

一面の平舞臺。背景は海。あちこちに磯馴松。月はもう落ちて、夜明に近き心。

と、かけりもやうになつて、浦島右の揚げ幕からよろめき／＼駈けて出る。

長唄へわれや他、他やわれともしら雲の、いつまで空に迷はん。
と、狂亂の體にて、尙玉手箱だけをかへ、本舞臺まで来て、つまづき倒れ、次ぎの唄の間に、顔をあげ、だん／＼立上り、いろ／＼ある。

かけり
狂亂合戦などの所作

をろの鏡
山鳥の尾の鏡
山鳥は友を戀ひ
て鳴くに鏡を見
せれば慰むら
むいとあはれな
り
(枕草子)

長へたらちねの、父の怒りの言の葉を、今こそ思ひいだしたれ、われ
或時は影を追ひ、また或時は形のみ、おいぼれにけり、片輪車の、足
弱車、時世にも、七代おくれしおぞのわれ、へをろの鏡の碎けては、
返らぬむかし悔めども、せん方なみの打寄する、浦こそもとの浦
なれど、よすがもあらぬ浮標身かな。へあゝ、この上はこの浦の、底
の藻屑と思へばぞ、いやなつかしきわぎも子よ、などわれ諫を聽
かざりし。今ははやとこよべに、へ歸らん傳手も、せんすべも、な
みぢはるけき八重の隈。

と海に向つて絶望の振、と泣倒れる。こゝへせはしき間奏につれ
て郎子と郎女とが、やはり右の揚げ幕から走つて出て、きつと本舞臺
を見て、

長へあれこそ先の物狂ひ、いでく、なだめ、おてゆかん。

と、本舞臺へ来て、

長へのう、返らぬをいたづらに、なげきたまふな、旅人よ。

と、浦島を介抱する振。浦島はそれにかまはず、次の文句くり返し

長へ歸らん傳手も、せんすべも、なみ路はるけき八重の隈。

と、よろめきつゝ立上りて、よろしくある。

長へあら、いたはしや、何事も、耳には入らず候よ。へのう、その持つた
る玉くしげは、何せん料にてあるやらん。

と二人よろしくある。これにて浦島はじめて玉手箱に心附いたる
思入れ。

長へなに、此の持つたるくしげをば、いかなる料にするぞとか。へ今
こそ思ひいだしたれ、その面影のこのうちに、籠るとぞいひし此
のくしげ、命きはまり、いとせめて、彼を慕はんそれまでは、開くな

といひし此のくしげ。

と、急に紐を解きて、蓋をとらうとする。と、二人はとめて、
長へのう、さる由緒ある箱ならば、粗忽に開きたまふなとよ。

と、これよりやゝ長き間奏につれて、あけようとする、あけさせまいと
する。三人にて争ふ振いろくありて、とど、あけると、箱の中より白
氣が立昇る。郎子と郎女とは驚いて、ずつと左右へ退く。浦島は大
きな松の根方へ倒れる。

と、其の白氣のうちより乙姫が現れ、次の唄につれて、郎子郎女へよろ
しくこなし。やがて倒れたる浦島を介抱して唄一ばいに、切穴へ消
える。

長へやまと人、風吹荒れて、雲亂れ、そきをりともよ、わを忘らすな。

と、郎子郎女は呆れ驚きつゝ、乙姫の後ろ姿に見惚れてゐる。とど、郎

やまと人
大和べに西吹き
あけて雲ばなれ
退き居りともよ
吾忘れめや（古
事記黒姫）

子郎女歌ふ。

郎子へふしぎやな、人かと思えて神かとも。

郎女へ拜まれたまふ女性神。

郎子へ稀有にたふとき影向の、

郎女へまぶし、

郎子へいつくし、

二人へありがたや。

と、ひざまづいて、乙姫の消えしかたを伏拜みつゝ、

二人へいつの世か忘れん。

と、歌ひ終ると、地方の長唄になる。

長へあら、忘れたりや、物ぐるひのいぶかしや、影もなし。

と、二人立上りてあちこちと尋ねる振。と、浦島は若さうつくしき容

貌の神仙となりて、せりあげにて、松かげより、次の唄につれて、徐かに舞つて出る。

へうつゝ世の夢は覺めたり、けふよりは、うつゝ世はなれ、とこよべに、長く生けらんわが身なり、さりながら、わかうどよ、今見てし常世の影を、ゆめな忘れそ、しかあらば、うつゝに常世移す折、とほくはあらじ、あれを見よ。

と、海上を指して、よろしくある。此の時正面、水平線へ目ざましき朝日が昇る。

長へ豊さか昇る朝日影、闇吹晴るゝ四方の山、四方の山。

と、二人を枷によろしくある。此の以前、西洋樂がかすかに奏しはじめられてをり、間奏の間に、長唄と程よく調子が合ふやうになる。と、次の唄につれて、三人の連れ舞ひになる。

へ朝づく日

隈なく照らし、あまねく惠む。

朝づく日

醜き忌まず、きたなき捨てず、

心は大空、光は土を

離れず永久に

と、西洋風の樂曲と長唄風の曲とが調和して來る。

へ永久に離れず射す日影。

あはれく、

今こそ悟れ、うつし世を

忌まで常世にあこがるゝ

忌まで常世にあこがるゝ

わたくし心なき民ぞ、
常世移さんうつし世に、
移さん常世、いつか此の世に。

と、朝日は、紅玉のやうな色から黄金色にかはり、五彩・七彩とも見える目ざらしい光線が、大空一面に、車の幅のやうに放射する。三人はよろしく引張の見えにきまりて、幕。(長生新浦島)

高須芳次郎

文學者
號は梅溪
明治十三年大阪
市生

一三 現代文學の傳統

高須芳次郎

西歐文學の現代文學に與へたる影響に較べると、江戸時代若しくは古代日本文學が、現代文學に齎らした印象感化は遙かに稀薄且微弱である。そして其の期間も亦連續的でなくて、斷續的

近松

近松門左衛門
元禄時代の淨瑠
璃作者
享保九年(一七三六)

西鶴

井原西鶴
元禄時代の小説
家
元禄六年(一七三〇)

其磧

江島其磧
京都の餅屋で小
説家
元文元年(一八〇六)

一九

十返舎一九
江戸徳川時代の
滑稽小説家
天保三年(一八三二)

三馬

式亭三馬
江戸後期の滑稽
小説家
文政五年(一八二四)

年四十七

であり、一時的である。それは歐化的傾向の強い時代にあつては當然のことである。それに現代人は回顧的、守舊的なるよりも、前進的、創新的ならんことを求むる傾向が強く、交通上の利便が世界の距離を短縮して、東西相影響する作用が敏活になつたからでもある。

現代文學に影響した在來の日本文學を數へて見ると、古代にあつては、萬葉集である。平安時代では、枕草子などである。江戸時代では、近松の淨瑠璃、西鶴、其磧、一九三馬、馬琴等の小説、治助、五瓶、南北等の脚本、芭蕉、蕪村、一茶らの俳句、眞淵、景樹、良寛等の短歌などである。頼山陽の詩文なども、漠然たる影響を一部の人々に與へたであらうと思はれる。其の他、今昔物語、古今著聞集、古事談、上田秋成の短篇といつたやうな隨筆類も、一つの素材とし

馬琴

瀧澤馬琴
江戸後期の小説家

嘉永元年(二五〇)

年八十二

治助

櫻田治助
江戸後期の狂言作者

文化三年(二四六)

年七十三

五瓶

並木五瓶
大阪の人

江戸後期の狂言作者

文化五年(二四八)

年六十三

南北

鶴屋南北
江戸後期の狂言作者

江戸の人

文政十二年(二四八)

年七十五

て用ひられ、或はそこからある暗示を與へたやうなこともあるらしい。

其中、最も有力なのは近松・西鶴等が小説に及した影響であらう。芭蕉・蕪村が俳句に及した力、萬葉の歌人が歌壇に與へた印象、南北等が明治初期の脚本に齎した波動なども著しいものがある。大正の文壇は暫く措いて、明治文壇に於ては殊に以上の人々の印象が、はつきり刻み附けられて居る。歴史は過去から現在へ、現在から未來への連続である以上、傳統から離れて獨立することは、文學に於ても許されない。

明治文壇に於て、西鶴の影響を逸早く受けたのは、幸田露伴・尾崎紅葉・樋口一葉等である。其の當時は未だ西鶴の研究が眞面目に行はれて居なかつた。紅葉・露伴も、單に文體の上に於て、西鶴

尾崎紅葉

名は徳太郎

硯友社の主盟

江戸生

明治三十六年歿

年三十七

樋口一葉

名は夏子

明治年間に於ける

女流文學者の

隨一

東京生

明治二十九年歿

年二十五

を摸しただけで、其の神髓には觸れ得なかつた。一葉にもさうした傾向があつた。内容に於ける西鶴の深刻・皮肉などは何人も容易に到り得ない独自の境地である。其の後、自然主義勃興前後から、西鶴の研究が始めて眞面目に行はれるやうになつたが、西鶴の骨髓を得た作品は、依然として一つも出ない。京阪出身の作家中からも、西鶴の如く、金を描き得たものが未だ出ない。また彼の如く、人情描寫を巧に實現し得たものも出ない。けれども西鶴に味到して、知らず／＼そこから、いくらかの感化を受けたものがあるらしく思はれる。西鶴の研究は、もつと行はれねばならぬと同時に、大正の西鶴は、もつと後に出るかも知れない。西鶴の作品は大正の文壇に對しても、何等かの暗示を與へねばやまない力を備へて居るやうに私は思ふのである。

島村抱月
名は瀧太郎
文學者
島根縣生
大正七年
年四十八

近松巢林子の影響は、小説の上よりも寧ろ脚本の上により多くあるらしい。小説に於て近松の構圖を學んだのは、島村抱月である。抱月は明治二十九年十月、坪内逍遙の主唱の下に「早稲田文學同人」として、近松研究に参加したために、其の創作について近松から多くの影響を受けたものと見える。右の近松研究は最も眞面目に行はれて、近松の特色、價値を闡明する上に與つて力があつた。それに先立つて、高山樗牛が長篇論文「近松巢林子」を明治二十八年四月の「帝國文學」に發表したのは注目し、概して西鶴よりも近松の研究が早く眞面目に行はれたのは、逍遙によつて頻に鼓吹されたシェークスピアとの對比から早く眼を着けられたからでもあらう。脚本の上に於て、誰が近松の影響を受けたかといふことは明白

伊井蓉峰
新派俳優
名は宇三郎
明治四年生

北村透谷
文學者
名は門太郎
明治二十七年
年二十七
文學界
明治二十六年北
村透谷島崎藤村
平田秃木馬場孤
蝶らが創刊した
雜誌

でないが、逍遙の指導の下にあつた若き劇作家のうちには、近松とシェークスピアの長所を取入れようと努力したものがあつたらしい。劇界では、明治三十五年、伊井蓉峰が、近松劇研究を標榜して上演したことは、當時一つの眞面目な新しい試みとして認められた。近松の影響は、主として劇文壇に對して深く深く印象した迹が見られる。

芭蕉から得た現文壇の影響は可なりに廣いものがある。蕪村の影響も、悔り難いが、それは日本派乃至子規一派の俳句に限られて居る傾があつた。一茶の如きは最近に至つて共鳴者を出した有様だ。ところが、芭蕉の影響は、現代の俳壇ばかりに制限せられて居ない。北村透谷、島崎藤村等の如き、文學界の人たちも内部から強く芭蕉に動かされた。嘗にそればかりではない、

吉田絃二郎
名は源次郎
文學者
明治十九年佐賀
縣生
芥川龍之介
文學者
明治二十五年東
京生

伊藤左千夫
歌人
大正二年歿
年五十
長塚節
歌人
大正六年歿
年三十五

大正文壇に於ける文士詩人等の一部にも影響を與へて居る。吉田絃二郎の如きは殊に芭蕉に傾倒し、芥川龍之介も其の研究を試みてゐる。芭蕉の俳句俳文に於ける寂しみ、清高な人生觀、純な宇宙觀などは今後一層闡明せらるべきと同時に、もつと芭蕉の影響を受けた詩人が生れ出るかも知れない。萬葉集の歌人が現代歌壇に及した影響もまた重視すべき價值がある。彼等が有した寶玉の如き朴茂と眞實とは、いつまでも光り輝いて居ると同時に、正岡子規等の一派を動かして、萬葉調の歌を作らしめた。そこから伊藤左千夫、長塚節等を出し、また「アララギ」の歌人も出した。萬葉の歌に於ける格調は兎も角も、其の心の眞實は、なほ現歌壇に與へるものがあるやうに思はれる。

河竹默阿彌
江戸の狂言作者
江戸生
明治三十四年歿
年六十

鶴屋南北が明治劇壇に與へた影響は、とても以上挙げた人々のものとは比較にならぬが、河竹默阿彌の脚本などは、南北の長所を取り入れた點が明かに見られる。默阿彌の行届いた脚色の巧みさは、南北によく似たところがある。其の江戸の色合を浮べたスケッチ風の場面の如きも、彼是共通した趣がある。けれども、大正の劇壇が、南北からの影響を受けたところは存外少なからう。

要するに、現代文學は西歐文學から受けた影響にくらべると、日本文學から受けた影響は遙かに少ない。恐らく、其の半ばにも達しないであらう。此の事は、宗教思想の上に於ても、同じく見られる。大正時代は暫く措いて明治時代に於ては、キリスト教思想が相當に文學上に影響したけれども、佛教思想は唯一人の

國木田獨歩
 名は哲夫
 文學者
 下總銚子生
 明治四十一年歿
 年三十八
 中村吉藏
 號は春雨
 戲曲家
 明治十年島根縣
 津和野町生
 内田魯庵
 名は貢
 文學者
 明治元年東京生

幸田露伴に影響した位のものである。それは佛教がキリスト教に劣つて居たが爲ではない。大乘佛教の價値は、キリスト教以上である。けれども歐化的傾向が長く現代を支配したため、其の勢が高頂に達した頃から、キリスト教熱も亦高くなつた。それに文學者詩人の中には、キリスト教が西歐文學の背景として有力であることを知り、其の中に含まれた異國情調に強く深く共鳴し、或は神の福音の前に敬虔に頷づいたものが少なくなかつた。徳富蘇峰、徳富蘆花、健次郎、島崎藤村、國木田獨歩、北村透谷等の如きは、キリスト教の傾向色彩を著しく表現した。中村吉藏も春雨と號した時代にキリスト教に深く歸依したことがあつた。内田魯庵が「暮の二十八日」を書いた頃は、矢張さうらしく思はれる點があつた。大正時代に於ては、武者小路實篤が、キ

武者小路實篤
 文學者
 思想家
 明治十年東京生

リスト教に傾倒した代表者であらう。またキリスト教を信じつゝ、一面、佛教をも尊重した綱島梁川の如き異色ある人もあつた。

それが大正十二年に至つて、漸く佛教思想を背景とした文學を生産しようとする傾向を示すに至つたのは、そこに種々の原因があることだが、時勢の推移が明かに窺はれる。キリスト教から離れるものが多くなつたかどうか、其の事は別として、現代新人中に佛教に共鳴せんとするものが漸次加つて來たのは、蔽ふべからざる事實である。(日本現代文學十二講)

一四 劍 難

中村吉藏

御用人宇津木六之丞入来る。五十四五歳の年輩。健かな體つき、眼を鋭く光らせて居室を檢める。

小性小河原秀之丞刀を捧げて入り、刀架にかけ、褥を直す。

井伊大老衣服を更めて入座

井伊（くつろいだやうに）六之丞、今日も生きて歸つた……あゝ、又あの菊が見られる。見事に咲いてゐるな。

宇津木はつ、無事にお歸り遊ばしてほつと致しました。毎日々々お顔を見るまでは胸が板のやうに硬ばつて居ります。

井伊 うむ……家にも何も變つた事はなかつたか？

宇津木 はつ、何の異變もございませぬ。

井伊 京都の主膳からは、その後、飛脚はよこさないか？

宇津木 昨夜の書狀が着きましたから後は、まだ別に何の沙汰もござ

主膳

長野主膳
井伊家の臣
京師に出て公式
の間を周旋す
文久二年（二三三）
斬らる
年四十八

清涼寺
彦根にある井伊
家の菩提寺
仙英
曹洞宗の僧井伊
直弼も就いて禪
を學ぶ

ございませぬ。

井伊 さうか？（といつて秀之丞の捧ぐる茶を飲む）いや旨い、殿中では、お茶一つうつかり飲めないからの。

宇津木 お大抵ではございませぬ。殿には御空腹かと存じ上げますが、例の通り、お膳部をさし出させませう？

井伊 いや、今日は家から持参した例の餅の分量が多かつた、おかちん腹……いや餅腹だから持がいゝよ。はゝゝゝ膳部はもつと後でよろしい。

宇津木 お疲れの處へ早速申上げるも如何かと存じますが、江州清涼寺の仙英禪師殿が祖師の御年忌とやらで、急に思ひ立つて江戸へ上られましたので、ちよつと御目通りが願ひたいといふ事で、彼方に控へて居られますが、如何取計らひませ

うか。

井伊 (嬉しげに) なに仙英和尚が? ……それはく御珍客ぢや、何日迄でも當邸にお泊め申して御款待せい。早速御目にかゝらう。

字津木 は……實は明日、中仙道から御歸山のやうなお話でございました。……では書院へ御出でなされますか?

井伊 明朝お歸り? ……それはあんまりお名残惜しいな……禪師と予とは師弟の交りぢや。書院への出開帳には及ぶまい。此處が却て心安くてよからう。御通し申せ。

字津木 は、畏りました。(退場)

井伊 師の御坊に、居ながらお目にかゝれようとは思ひもよらなかつた。これも不思議な佛縁であらう……暗くなつた。

秀之丞、燈明を點けい。

(仙英和尚、清癯鶴のやうな老禪師、六之丞に案内されて入來る)

井伊 (恭しく一禮) これはく好うこそ……思ひがけない事で、地獄で佛といふのはこの事でございませう。相變らず御健やかで結構でございます。

仙英 (二揖) 私もひよこり江戸へ出て來ましたのぢやが、つい貴方の顔が見たうなつてな。

(言ひくじつと大老の顔を見するて言葉切る)

井伊 何卒暫らく當邸へ御逗留なされては?

仙英 (黙つて暫く見するてゐたが) 井伊公、貴方は日本のために、今、大難に出逢つてゐられるな。

井伊 は、いかにも、大難に出逢つてゐます。

仙英 さうぢやらう、右へ向いても、左へ向いても、上を見ても、下を見ても、白刃の劔で八方塞がりぢや。劔の山の眞中につゝ立つてゐられるのぢやな。

井伊 は、如何にもおつしやる通りでございます。

仙英 貴方の顔には、劔難の相がありくゝと出てゐますぞ。

(井伊黙す)

宇津木 えつ、あの劔難の御相が？

(仙英黙つて頷く)

井伊 は、實は、かげ腹を切つて、生き存へてゐる氣で居りましたが、今の御一言で、私の往くべき途がはつきり見えました。有難う存じます。

仙英 いや、さすがは井伊公……須らく千仞の嶮崖に手を撒して、

絶後に蘇られい。

井伊 是、生にあらざ、死にあらざ、唯、一箇の無の字あるのみ……覺悟は定めて居ります。

仙英 それで先づ安心しました……時に、私に一人お供がある。身分違ひぢやから、大老様の御前へは出られぬ。御多忙の折柄、正式でない、ほんのお茶一服立てゝ載いて、このお室をそのまゝ、昔の埋木の舎の澗露軒にしたら、仔細なからうと思ふが、どうでございませうな。

井伊 委細心得ました、お供は誰でございませう、一寸と見當が付きかねますが、逢へば分りますな。秀之丞、薄茶を立てい。お供は何卒此方へ。六之丞、御案内せい。

宇津木 は……。(六之丞と秀之丞は立つて行く)

埋木の舎の澗露軒

直弼が井伊直中の十四男鐵之介後鐵三郎と稱し、まだ封を嗣がず、僅か二百石を受けて居た時の住居

仙英 はあ、昔ながらに、楊柳の樹が御寵愛と見えて、この樹はいつも井伊公の影身に添うて植ゑられてゐますな。

井伊 それも秋に逢うては葉が散りくゞで、あゝして骨許りになつて、鞆然ぼんぼんと立つて居ります。だが、例令骨が舍利になつても楊柳はやつぱり楊柳に相違ありませんでな。

仙英 御尤でござる。

(六之丞粗末な衣装の老人左官利八を連れて入来る)

宇津木 お連れ申しましてございます。

利八 殿様……左官利八めでござります。

井伊 (膝を拍つて) あ、誰かと思つたら昔の茶友達、左官屋利八か。よく来てくれた。よく来た、禪師と同道で江戸へ出たのか。

仙英 一生に一度、江戸が見て死にたいといふ事で、一緒に來まし

たちや。

利八 お庇で江戸も見物しますし、大老様にもお目にかゝれまして、もう心置なく成佛が出來ますわい……大した御出世でござりますな。

井伊 いや、汝と逢へば、昔ながらの部屋住の鐵之介に戻つたやうな氣持がするよ。どうぢや、近頃、世間の景氣は。

利八 あきまへんな。黒船が來よつて、愈、貿易が開けると、何でも異人が金銀を皆浚つて行くのや云ひましてな、米の値がどんどん上りますのや、皆、難儀しとりますさかい。

六之丞 これくゞ、御前でそのやうな事を……

井伊 いや、構はぬ。ありの儘聞かせてくれるから善いのぢや：
：成程な、あの近江の湖水の井堰を急に切つて落したら、川

下の小魚は一時、皆脾腹を返さうも知れぬ。開港が凡ての國民に智慧と富とを貢いでくれるまでには、長の月日が懸らう。それまでは井堰の口を切つた者は皆に呪はれよう。

仙英 (頷いて) 御意の通りぢや。

(この間に秀之丞が御茶を運んで来る)

秀之丞 奥方様御部屋様が、禪師様へ御目にかゝりたいとおつしやります。伺うて見てくれとのお事でございます。

井伊 あ、皆、禪師には、國で御目にかゝつた事があらう。遠慮なく、この室へ參つて、一緒にお茶を召上れといへ。

井伊 いや、利八、決して遠慮はいらん、そのまゝ……それから何か他に汝の耳に入つた面白い世間話でもないかた。

利八 別に面白い事もおまへんな、東海道中何處へ行きましても、

やれ大砲を拵へるの、やれ兵隊の訓練やのと、運上ばかり高う取られて閉口やいふけつたいくその悪い話しばかり聞かされましてな。一體この先、日本はどうなりますのやろ。

仙英

成るやうに成るのぢや、はつく。

(昌子の方とお静の方と入来る。和尚へ挨拶)

仙英 いや、その後は……はい、一寸とお江戸へ上りましたで……まづ御健勝で何より……

井伊 あのお客は、左官屋利八、私の昔の茶友達ぢや。

昌子 は……左様でございますか。

利八 はつ……高上りいたしました……お茶を戴きに參りました……

井伊 お静は利八をよく知つてゐるな。

お静 はい、存じて居りますとも……

仙英 どれ戴かう。

(二座茶碗を傾ける)

利八 お服加減結構に頂戴いたしました。

英仙 では、これで御免蒙ります。

お静 あの只今、御會席を……

仙英 いや、御用多の處、長坐は無用、これで失禮いたします。

昌子 折角、お目にかゝれましたら、御法話を承れる事を樂みにして居たのでございます。

お静 あの私も、久し振で有難いお話を聽かれる事と思うたのでございます。

仙英 別に有難いお話も有難くないお話も持合せませんぢや。

茶の湯も一期一會なら、お互さまも一期一會。逢へば別れる、別れれば逢ふ。この後生の一大事さへよく分つて居れば、人間成佛しますぢや……井伊公、左様なら。

井伊 左様なら、禪師……これがお別れぢや。

仙英 いかにも、お別れぢや……

(暫くじつと顔を見合せてゐたが和尚消えるやうに入る。利八も挨拶そこそこにつゞく。六之丞秀之丞送つて行く) (井伊大老の死)

菊池寛

小説家
戯曲家
明治二十二年高
松市生

一五 文藝と人生

菊池 寛

或作品を読んで、うまい〜と思ひながら、心を打たれない。他の作品を読んで、まづい〜と思ひながら、心を打たれる。或作

品を讀んで、よく描けてゐると思ひながら、心を打たれない。他の作品を讀んで、ちつとも描けてゐないと思ひながら、心を打たれる。この二つの場合を誰でも經驗してゐると思ふ。文壇有数の名家の作品を讀んで、うまいと感心する。が、心は動かぬ。投書家程度の人の書いたまづい短篇を讀んで、つい心を打たれることがある。

こんな場合を、どんなに説明してよいか。藝術的作品としては、前者が勝つてゐること萬々であると思ひながら、さて心を動かされるのは後者であるとしたならば、後者の持つてゐるものは、何であらうか。或人は、後者には貴い實感が書いてあるといふであらう。他の人は、後者には得難い經驗が書いてあるからといふであらう。とにかく後者には、前者の持つてゐない、何かあ

ることだけは、誰でも首肯するだらうと思ふ。私は、この後者の持つて居る價值が何であるかに就いて考へたいのである。

或人達は、作品には藝術的價值以外のものは存在しないといふかも知れない。私にはさうは思へない。或作品の中には、藝術などといふものは、別に或價值が存在し得るものだと思ふのである。(かういつて來ると、藝術とは何ぞやといふことが考へられなければならぬが、私は今のところ、クロイチエやスピングリーンが唱へた「藝術は表現なり」といふ説を信じて居る。いろいろ考へた末に、藝術表現説が、眞實に近いことを信じて居る。)私は或作品の中に藝術的表現などは全く別に或價值が存在するものだとおもふのである。例へば、ロマン・ローランの小説の

Romain Roland
(1868—)
佛國の現代の文學者
の著者
の著者
の著者
の著者

Benedetto Croce
(1866—)
伊太利の現代の哲學者
の著者
の著者
の著者

尾崎士郎
文學者
明治三十一年愛
知縣生

里見氏
里見源
本名山内英夫
文學者
明治二十一年横
濱市生

芥川氏
芥川龍之介
文學者
明治二十五年東
京生

中にある一つの挿話、佛蘭西の兵士が戦線で、獨逸の若い十六七の兵士を刺し殺さうとすると、その少年が手を差上げて、母！と叫んだ。といふ話は、小説に書かゝれると書かれないにかゝはらず、人を動かす力を持つてゐる。その力は既に一の價値だと思ふ。去年の正月だつたと思ふ、時事新報が短篇小説を募集したとき、尾崎士郎君の「獄中より」とか何とかいふ小品が當選した。そのとき、選者の里見氏は、小説として勝れて居るかどうか分からないが、といふやうなことを言はれたと記憶するが、あの手紙は表現などといふことをはなれて、我々の心を打つ力を持つてゐた。

芥川氏の「蜜柑」と云ふ小品がある。私は、あの題材を芥川氏から口頭で聞いたとき、既に或感動に打たれた。

藤森氏
藤森成吉
文學者
明治二十年長野
上諏訪生

ヴィヴィッド
生けるが如
く
眞に迫つて

又、私の「恩讐の彼方」と云ふ小説、あの筋書は、ちやんと耶馬溪案内記に載つて居るのであるが、案内記を読んでも、既に或感動に打たれるだらうと思ふ。文藝作品の題材の中には、作家がその藝術的表現の魔杖を觸れないうちから、燦々として輝く人生の寶石が澤山あると思ふ。

それから、又こんな場合も考へられる。例へば、藤森成吉氏の「舊先生」である。あの作品で、われ々の心を動かすもの、一つは、「舊先生」の妙趣極りなき性格である。が、「舊先生」の性格は藤森氏の藝術とは、別個の存在である。あの性格の我々を動かす力は、藤森氏の功績ではない。あの性格そのものに存在して居る力である。藤森氏が、他のA先生なりB先生なりを「舊先生」以上にヴィヴィッドに書いても、我々は舊先生から受ける程の感銘は

George Bernard Shaw
(1856—)

シ
ー
英國の現
代の戯曲
家批評家

受けなかつただらうと思ふ。
私はかうした意味から、文藝の作品には藝術的價值以外の價值が、儼存することを信ずるのである。その價值の性質は何であるか。我々を感動させる力、それにはいろ／＼あるだらうが、私はそれを假に内容的價值といつて置きたいと思ふ。(これは、便宜的な言葉である。われ／＼の生活そのものに響いて來る力として、生活的價值といつてもよいと思ふし、それを仔細に分つて、道德的價值、思想的價值といふやうに別けてもいゝと思ふ。)又、バーナード・ショーの作品などは、藝術品として彼是言はれながらも、われ／＼の心を打つ點に於て、他の藝術的戯曲を超越すること萬々である。

賀川豊彦
社會事業家
思想家
明治二十一年神
戸市生

かうした内容的價值の例はいくら擧げても限がないが、賀川豊彦氏の「死線を越えて」の場合もその一つである。私も文壇人の常として、相當の反感を以てあの作品を讀んで見たが、描けてゐない描けてゐないと思ひながら、涙ぐまずには居られなかつたところが、篇中幾個所となく存在した。
これだけ言へば、文藝作品には、描けてゐると描けてゐないとは別に、一の價值が存在してゐることを誰でも首肯するだらう。表現といふことを、内容と表現といふことについていろ／＼議論が起るが、それは表現と云ふ言葉を解釋する深淺に依つて起ることが多い)どんなに深くどんなに神祕に解釋しても、表現とは全く別に他の價值が存在し得ることを否定することは出來ないと思ふ。

これまでは、誰もあまり文句なくついて来てくれるだらうと思ふ。私は一步進めて言ひたい、この内容的價值が、文藝の作品に於ては、可なり重要である。と。かういふと、藝術至上主義者乃至その傾向のある人の反感を買ふことは、分つて居るが、私はさう主張せずには居られないのである。

藝術は藝術的價值さへあれば立派な藝術だ。よく描けてゐさへすれば、立派な藝術だ。

私は、それに少しも反對しようとは思はない。藝術の能事は、表現に盡きる。「交番の前に、巡査が立番をして居る。其處へ通行人が来て道を訊く。」さうしたことでも、それが立派に完全に描

けてゐれば、私はそれを藝術として立派だといひたいのである。私は、藝術を説明して、魂がどうしたの、心がどうしたの、なんていふ神祕説は嫌ひである。藝術の本能は表現である。無論、表現には魂や心がどうかするには違ひないが。さて、私は前述の意味で、作者が描かんとして居ることを立派に表現して居る場合は、それを立派な藝術品とするに躊躇しないのである。さて立派な藝術品なら、それでいゝぢやないかといふと、私はそれでよくないといふのである。私は、藝術品も、藝術的價值以外に、所謂内容的價值を持つてゐなければならぬといふのである。その理由を言つて見よう。

文藝作品に接するとき、われ／＼が求めて居るものは、何かとい

ふに決して藝術的評價だけではない。我々の下す評價は何かといふと、決して藝術的評價だけではない。我々は藝術的評價を下すと共に、道徳的評價を下し、思想的評價を下して居るのである。

「これは藝術の作品である。たゞ藝術的評價を下せ」といつたところで、其處に人生の一角が描かれてゐる以上、それに對して道徳的評價を下さずにはゐられないのである。其處に無反省な蕩兒の生活が描かれてゐる以上、それを非難せずにはゐられないのである。それがどんなに、ヴィヴィッドに描かれて居ても、その生活に價値を見出すことは出来ないのである。何等かの思想が描かれてゐる以上、それに對して思想的批判を下さずにはゐられないのである。戯曲の主人公などが、つまらない思想

を懷抱してゐる以上、その性格描寫がどんなにうまくつても、その舞臺技巧がどんなに巧でも、輕蔑せずにはゐられないのである。

文藝の作品に對して、道徳的評價一寸ことわつておくが、道徳的といつても、コンヴェンショナルな意味で言つて居るのではない。いや、思想的評價を下してはならないといふのは藝術家の逃口上である。文藝が人間の大きな一である以上、道徳的評價や思想的評價を避ける譯には行かないのである。藝術的價値を作るだけで満足してゐる人、その人を藝術家として尊敬する。が、そんな人は自ら好んで象牙の塔に立てこもる人である。藝術的價値、藝術的感銘、それも人生に必要なといは謂はない。それも人生をよりよくする。わるくするとは謂

コンヴェンショナル
ナール
傳統的な
紋切形の

象牙の塔
tower 美の世界
Ivory 藝術の殿堂

武者小路氏
武者小路實篤
思想家
小説家
戯曲家
明治十年東京生

倉田百三
思想家
文學者
明治二十四年廣
島縣庄原町生

はない。が、それだけを作るだけではあまりに頼りない。あまりに心細い。武者小路氏が當代青年を動かした力は何であらうか。それは氏の作品の藝術的價値ではない。氏の作品の道徳的思想的價値ではなからうか。
私は藝術家を二分したいと思ふ。たゞ藝術的表現を念とする作家とそれだけでは満足し得ない作家との二種類である。無論、その間には多くの階段はあるが。
當代の讀者階級が作品に求めてゐるものは、實に生活的價値である。倉田百三氏の作品、賀川豊彦氏の作品などの行はれることを見ても、思ひ半ばに過ぎるだらう。が、それを邪道とし、藝術至上主義を振りかざして、安閑として居てもいゝのか知ら。凡て他の物に幻覺を持つてゐない大人通士にして、猶藝術に對し

て、初心な神祕説を唱へてゐるものが、頗る多い。藝術、それだけで、人生に對してそれほど大切なものか知ら。藝術感銘、それだけで、人は大いに満足し得られるか知ら。
私は藝術はもつと實人生と密接に交渉すべきだと思ふ。繪畫、彫刻などは純藝術であるから交渉の仕方に限られてゐる。(それだけ、人生に對する價値が少ないと思ふ)幸にして文藝は題材として人生を直接に取扱ひ得るから、どんなにでも人生と交渉し得ると思ふ。それが畫家などに比して文藝の士の有する特權である。

ロシヤの饑饉に於て、人は生きんがために宗教を忘れてしまつたといふ。況や藝術をや。生活に奉仕することに於てその職

責を果すのである。無論、藝術的感銘を與へることに依つて生活をよくしないとは謂はない。がそれは、稀薄であつて、匂の如きものに過ぎない。

私は藝術が藝術である所以は、そこに藝術的表現があるかないかに依つて定まると思ふ。がその定まつた藝術が、人生に對して重大な價值があるかどうかは、一にその作品の内容的價值、生活的價值に依つて定まると思ふ。

私の理想の作品といへば、内容的價值と藝術的價值とを兼備した作品である。語を換へて言へば我々の藝術的評價に及第するとともに、我々の内容的評價に及第する作品である。

イブセンの近代劇、トルストイの作品が、一代の人心を動かした

Tolstoy (1828—1910)	トルストイ	Ibsen (1828—1906)	イブセン
の著者	の著者	の著者	の著者
和、復活	戦争と平	家	家詩人
	哲人小説	人形の	ノルウェ
	ロシヤの	の戯曲	エ

理由の一は、あの中に在る思想の力である。その藝術だけの力でない。藝術のみにかくれて、人生に呼びかけない作家は、象牙の塔にかくれて、銀の笛を吹いて居るやうなものだ。それは十九世紀頃の藝術家の風俗だが、まだそんな風なポーズを欣んで居る人が多い。

文藝は經國の大事、私はそんな風に考へたい。生活第一、藝術第二。

師範國文第一部用卷九終

大正十四年十月二十七日 印刷
 大正十四年十月三十日 發行
 大正十五年三月十三日 訂正再版發行

卷	定價	五昭和臨時定價
卷一・二	金四十三錢	金七十錢
卷三・四	金四十錢	金六十五錢
卷五・六	金三十九錢	金六十四錢
卷七・八・九	金三十八錢	金六十二錢
卷十	金四十三錢	金七十錢

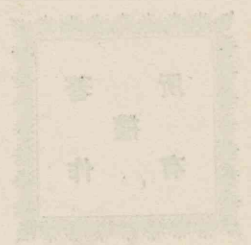


編者 吉田彌平
 東京市小石川區高田老松町五十二番地
 印刷者兼發行者 上原才一郎
 東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店
 東京市神田區通神保町六番地
 (電話) 神田三〇八七番
 (振替口座) 東京三二七番

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

皇朝書目考卷之四十五
 皇朝書目考卷之四十五
 皇朝書目考卷之四十五
 皇朝書目考卷之四十五



皇朝書目考卷之四十五
 皇朝書目考卷之四十五

皇朝書目考卷之四十五
 皇朝書目考卷之四十五

皇朝書目考卷之四十五
 皇朝書目考卷之四十五

大正十五年三月十三日
 大正十五年三月十三日
 大正十五年三月十三日
 大正十五年三月十三日

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
...

皇朝書目考卷之四十五
 皇朝書目考卷之四十五

第五卷年
廣業武義





広島大学図書

2000302259

